

第13回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第13回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一八年度第13回「文芸思潮」エッセイ賞には、一年お休みをいただいたにもかかわらず、二六七篇という多数の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。今回も十五歳から九十七歳まで幅広い世代から寄せられ、さらに地域的にもアメリカや、太平洋諸島、ヨーロッパなどからも御応募をいただき、地球的な広がりを得たコンテストとなりました。貴重な体験だけでなく、歴史としても重要な記録や、社会に対する鋭い批評も多く寄せられ、現代に生きる人々の様々な姿が反映された充実した内容でした。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって激しく、厳しく討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞なども、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

今回授賞式は開催せず、賞状、賞金、記念品の発送をもって代えさせていただきます。お許しください。

最優秀賞

「五九〇グラムで産んでしまつて」

小川かをり (東京都狛江市)

「炎」

上原翠子 (熊本県熊本市)

優秀賞

「汽笛のなく家」

植村恵子 (長崎県長崎市)

「ピロピロ笛」

望月ひろこ (愛知県春日井市)

「確かな友情」

宮尾美明 (愛知県愛西市)

「生きる」

音葉 紬 (長野県上田市)

「子供のときの飴売り」

龍口 宏 (埼玉県さいたま市)

「タエさんと天ぷら鍋」

田中美晴 (大阪府豊中市)

奨励賞

「定山溪はつ恋軌道」 金田一 淳 (青森県三戸郡)

「駅」 近藤幹夫 (福井県勝山市)

「山椒大夫の姉」 九条之子 (東京都昭島市)

「母のアルバム」 牧 康子 (東京都杉並区)

「湯けむりの中」 有澤かおり (富山県高岡市)

川畑和嗣 (北海道札幌市)

「文芸思潮」エッセイ賞

「かたわらのバルーン」 坂本かつえ (山梨県北杜市)
「小さな国の哲学」 森崎律子 (大阪府大阪市)
「祖母の足音」 沖田有 (福島県会津若松市)
「気になる人」 瀧沢 鈴 (北海道函館市)
「運転免許返納」 前岡光明 (東京都町田市)
「古代の海から—海からの贈り物—」 末永卓幸 (ミクロネシア連邦)

「『百年の孤独』を想う」 村松佐保 (群馬県吾妻郡)
「塩津港の簪」 山田まさ子 (大阪府堺市)
「闇取引」 飯島もとめ (長野県長野市)

「孝行のしたい時分に」 濁川楨雄 (大阪府大阪市)
「ふるさとを離れる」 三木俊平 (兵庫県三木市)
「古井戸でんらく顛末記」 門脇雅子 (埼玉県入間市)
「お地藏さん」 斉藤はな絵 (北海道岩内郡)
「老桜」 大沢みゆき (東京都東久留米市)

「マサの命」 守藤康次 (群馬県館林市)
「あした」 水木 翠 (沖縄県那覇市)
「悲しみのまにまに」 秋葉 稔 (岐阜県可児市)
「昭和は若かった」 田中文字 (滋賀県大津市)
「社会批評奨励賞」 細野耕司 (長野県佐久市)
「十万年」



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生れ
法政大学中退
1982「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

言葉の体験としての作品

三神弘

最優秀賞の小川かをり「五九〇グラムで産んでしまつて」は、「極小体重児」として生まれ、「外出時も寝るときもずっと酸素のチューブを鼻につけていた」というわが子との、成長の記録である。どのような希有な、あるいは貴重な体験も、それを描こうとするための言葉の体験が重ねられなければ、作品にはなつていかない。冒頭の「この話は二十年前のことであるが、語れるようになったのは最近のことである」は、このことを示している。したがって読者は、「母親である私のせいだ」というそ

や息子に寄せる情愛はもとより変わることがなく、いわば家庭は「炎」のなかで営まれ、歳月を経ていく。夫も「炎」のなかで「白髪になり」、息子も「結婚して」いく。作品は「事故から三十年」を経て書かれたものであり、高齢となった「私」の心境がうかがえる。

優秀賞の望月ひろこ「ピロピロ笛」は、人生のある日の平凡な出来事のように「私の夫は難病を患っている」と書き出される。それから名付けられた病名、その症状、経過、「最後は寝たきり」という「難病」のあらましが、まるで、余生のあら筋のように、紹介されていく。なるほど難病であると、読者は人生というものに仕度されている不意の出来事に、身構えることになる。

語り手の、妻である「私」は、いわば「夫」と「難病」との、共同生活者といつてよい。しかし、その語り口は、悲壮な訴えごとにはならず、おだやかで、客観的であり、作品はおのずと、静かな老夫婦の日常のスケッチになつていく。あわせて、「私」の人間性、人生への向き合いかたというものを読み取られて、そこに作品の質の高さがある。

言語リハビリのために「私」が思いついた「ピロピロ笛」は、作品のテーマを明らかにしている。昔お祭りで売っていて、いまは100円ショップで手に入る「ピロピロ笛」が、やがて、「夫」のリハビリに効果をもたらしていくことになる。最新の医療機器でもなんでもなく、気安

の理由や、「心臓肺高血圧の状態」といった医療用語に過度の関心をもつことも、また、治療、闘病といったいわば起承転結のドラマを求めようとはしない。読み取っていくのは「家の中の酸素製造機から100メートルもの長い管を引きずって」「公園」や「プールにも行った」という一人の少年の、世界を知つていこうとする眼差し、行動である。

そして、もとより「ボンベを背負つていっしょにプールに入つた」という母親の姿ではあるが、読者は、息子を氣遣う母親の苦勞の訴えというよりも、少年にともない、導かれ、たとえば、水の照り返す光や感触とともに、わが子の生への果敢さを実感していったであろう過程に、思いを寄せる。作品の結びに、いまわが子は「島根大学生物資源部に在籍していて写真部と山岳部で」と、細かに記すところに、母親の今日の喜びがあり、誇りがある。

最優秀賞の上原翠子「炎」も、一瞬の事故を、歳月を経て、報告ではなく、言葉の体験として作品にしている。平和な家庭の日日が描かれ、次に、夫と息子が交通事故に遭い、一人となった暮らしに転じていく。こうした構成が、生と死というものを際立たせ、遺された「私」の失意を他人事にさせない。

一人となった「私」は、「仏壇のロウソクの炎」に向かつて「二人に話しかける」日日を送ることになるのだが、夫く、身近な玩具であることが愉快だ。さらに「私」の提案で、「夫」は「ピロピロ笛」と「ピアノとの合奏」に挑むようになり、次の展開へと、読者を誘っていく。

こうした生活をおして、夫婦の情愛がうかがえるところも、読みどころだ。「夫」も病人としてばかりでなく、気難しかったり、食いしん坊であったりと、人柄のある登場人物になつていて、親しめる。「ピロピロ笛」が何回吹けるのか、夫婦で競い合う場面は、病氣を得ながらも、人生の至福のひとつときのようにであり、作品のなかで、もっとも美しい場面だ。

奨励賞の瀧沢鈴「気になる人」は、終戦後の小学校の朝の風景からはじまっていくが、子供達の遊びや、表情、規律から、時代がみえてくる。また、子供達への細やかで、行き届いた眼差しに、新任教師の「私」の風貌が明らかになつていく。そうした児童達のなかに「はみ出しっ子」がいて、新任教師を困らせることになつていく。

この「はみ出しっ子」は、雨の日に「先生おんぶして」と甘えるのだが、これに「いいよ」と応え「おんぶする」新任教師とのやりとりには、「はみ出しっ子」が垣間見える無垢な感情があり、その家庭の状況があり、作品の読みどころだ。新任教師の、苦々しくも、教師であるうとする心持ち、態度も伝わってきて、読者にとつても、大好きな先生になつていく。

ささやかな出来事のなかに、また、出会いに、人生を感じさせてくれる作品だ。遠い日のことが、なぜ、どのように、こころのなかに留められていくのか、記憶というものの性質をうかがわせてもくれる。人のなかを過ぎていくそれぞれの時間、それぞれの生活、そして、たちまちに昨日が、今日が、過去になっていくことへの感慨もある。平明で、洗練された文章で、読者に手渡すものの多い作品だ。



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 群像 79 「流瀆の島」で受賞 新人長編小説賞 98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンターネット主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞 2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞

運命との闘い

五十嵐勉

一年お休みをいただいた後のエッセイ賞で、募集の発表も遅れたため、応募総数は二六七篇と以前よりも四十篇ほど少なくなったが、内容は充実していた。いい作品が多く、三次予選通過の数も例年より増えただけでなく、入選・佳作・奨励賞あたりの層はたいへん厚く、それが上になってもおかしくない接近したレベルだった。うまくなっている人たちも多かったし、初めての応募の方も、粒揃いという印象だった。したがって選考にはどれを落とすか、たいへん難渋した。

たくさんのお応募作を読ませていただくときにも感じるのだが、実に人生には様々な運命があり、様々な苦難と試練があり、みなそれを背負って懸命に生きていることが迫ってくる。その姿に胸を打たれ、共感し、教えられ、励まされる。今回は特にその思いを強くし、みなこのような人生を背負って生きているという感銘を深くした。それぞれの深い思いがたくさんの人の胸の中に入って、息づきを共にする。たしかに響き合うことで何かが生まれ、その労苦や苦難が散って、それぞれの支え合いになる。文学の原点を教えられる気がした。一度は中断しかけたエッセイ賞をまた始めたのは、何よりもその文学の真の渦を断つてしまふことに、目に見えない非難が輻輳し、こちらに矢が放たれている気がしたからである。人生の尊いものを壊しているような後ろめたさを覚えたからにはかならない。努力と時間を惜しむことなく、その期待に応えなければならぬと思ひ直した。それを痛感し、再確認したのが今回のエッセイ賞だった。深くお詫びし、再開の喜びを分かち合いたい。

最優秀賞の二作は、特にそれが鮮烈だった。小川かをりを

佳作

- 「小さな本屋」 鎌田 誠
- 「自然治癒」 岩谷隆司
- 「駄菓子屋の夢のあと」 藤井典央
- 「ちよんどん」 早月春美
- 「さだめ」 上杉 辰
- 「老いの車」 大島直次
- 「白い手」 鈴木あぐり
- 「百歳の母の人生」 友 修二
- 「新任教師」 紙屋里子
- 「なぜ叩く」 くめちゃん
- 「笠置山」 川西葉吉
- 「終い湯の客」 中武 寛
- 「祖父の物語。その時歴史が動いた。」 藤森敦子
- 「大雪山のもとで」 河本美穂子
- 「「老い」の新しい夢を」 川口 翠
- 「万感の思い」 中野邦廣
- 「五十嵐勉編集長をノーベル文学賞へ推す会」 葵井禎子
- 「会員募集のお知らせ」 宮寺良平
- 「日野草城の句に寄せて」 佐藤たか子
- 「義広おじいさんのピアノ」 中 他見男
- 「宝探し」 藤崎良子
- 「つぼね」 鬼山ランチ
- 「未熟な母の懺悔」 奥田 登
- 「大阪のおばちゃん」

社会批評佳作

- 「除かれた雪」 三森順乃
- 「人情時代劇」 鎌田絢也
- 「家を燃やす」 武藤蓑子
- 「傷は海よりも深く」 深雪 朔
- 「雲の上の道標」 長枝 舞
- 「未来へ号」 小林カジノ
- 「嫌な予感」 川島英理沙
- 「親の仕事」 佐藤名緒子
- 「インド人の嫁」 有村一花
- 「僕の家にはリスが住んでいた」 長谷川敏久
- 「マイナーの方が盛り上がる」 ORE
- 「七つの子」の謎」 西本美彦
- 「言葉の抜け殻」 水谷忠央
- 「神道と宗教」 福本彰一
- 「国際会議で見た必勝の方程式」 六藍光洋
- 「街並み」 塚原右京
- 「尺取虫のため息」 梶川洋一郎
- 「一陣の風に吹かれて」 上木戸 晃
- 「来訪者」 むかいはつこ
- 「サー、もう一度、歩こうよ」 印南房吉
- 「母、茶毘に付して」 渡辺 蓮
- 「『むつ』に噛み付いた漁民の怒り」 黒岡 實
- 「アパートヘイトの火種」 竹中水前
- 「手話通訳者の健康を守る取り組み」 横山典子

氏の「五九〇グラムで産んでしまつて」は、超未熟児で生まれた赤ん坊を死に逆らつて全身全霊で育て上げるストーリーだが、命というものの尊い原点を教えられるとともに、助け合うことの交響音が迫ってくる。たくさんの人の支援、そして愛情によって困難を乗り越えて成人するその姿は感動的である。筆者の筆致は明るく、生命讃歌に到達している。素晴らしい作品だった。

もう一つの上原翠子氏の「炎」は交通事故の生々しい体験とその後の魂の交感を描いて、衝撃的な作品である。二時間前には元気でいた夫と我が子の、ダンプカーによってV字型にベチャンコにされた車の中の遺体に接するシーンは強烈で、瞬時にして幸福な家庭を粉砕する交通事故の悲惨さを訴えてくると同時に、家族の儂さを突き付けてくる。冥界に行ききれない魂が蠟燭の炎となつて、なお身辺に漂う様は、オカルト的な神秘性を濃くするが、思いの深さによって、逆に魂の真実を呼び起こして来る。人間の心としての自然さを表出している。それがこのエッセイの感動を呼ぶのだと思う。死体に残る体温を感じるシーンは、忘れることのできない命の感觸として、胸に残る。

優秀賞も良い作品が揃つた。派手ではないが味わい深い作品もあり、様々な立場での人生やその鮮やかな断面を表出している。

「汽笛のなく家」(植村恵子)は船のパイロットだった父親との子供時代の不仲を死後廃屋になつた実家を訪ねて最期を見出すストーリーだが、父親の一人暮らしや紙オムツの残骸を発見して、父親の悲惨な独り暮らしに、接点を持たなかつた人生のねじれを思い知る結末は強く迫ってくる。文学的な情感が溢れている点を選考委員の何人かは強く推した。表現に少し甘い点があつたので、それがなかつたら最優秀賞にもなつたかもしれない。

「確かな友情」(宮尾美明)は、飼犬に手を噛まれる話である。指を食いちぎられて、普通なら手放すか、処分さえしてしまふところだろうが、それを犬の心に立ち戻つてむしろ愛情を深めるところが、思いやりに満ちていて、共感と呼んだ。筆者の広い心には、動物との心の通い合いを超えて、紛争や戦争にまで拡大していけるだけの融和の基盤が覗いていることを感じた。

今年も病魔に冒される運命を題材にした作品に秀作が多かつたが「ピロピロ笛」(望月ひろこ)もその一つである。小脳が少しずつ萎縮していくその病は、運動機能が衰えていく。リハビリでそれを遅らせるしかないが、その道具にピロピロ笛という玩具を使う工夫に、筆者のひたむきさと挫けない明るさが匂つてきて、運命と闘う人間の姿が鮮やかに浮かび上がってくる。拍手を送りたくなる作品だった。「タエさんと天ぶら鍋」(田中美晴)は、不運の下に生き抜いた女性を温かい眼差しで見つめる切り取り方がいい。

入選

- 「必然として」 三村耀子
- 「幼子との向き合い方」 朝川 渡
- 「幸せの中に」 吉野さくら
- 「事件」 藤崎淳子
- 「マイコのお母さん」 河上美智子
- 「生きていくということ」 ダダ
- 「『編集』を楽しむ」 さらみずえ
- 「私の病氣と治療遍歴」 ジブ
- 「デ・キリコの絵」 酒井恵三
- 「アメリカのボランティア活動」 高橋祥子
- 「小道の音」 菊池満子
- 「母のひと言」 吉田宏子
- 「母親という神話」 吉見博子
- 「遺構が語るもの」 鯛かもん
- 「水たまりの魚つり」 むらかみゆきひこ
- 「私はここに居る、それだけ」 原田あやこ
- 「良寛さんは保父さんだったんだ」 弟子丸博道
- 「いのち生まれて」 立花樹香
- 「残り香」 辻岡真紀子
- 「霧氷」 和田恵子
- 「ためらい と祈り」 能勢里子
- 「思春期思考」 ヒロシマコウスケ
- 「やられたっ！」 富嶽庵
- 「日常」 小野 薫

- 「スイフヨウ観察記」 土田真子
- 「長姉の歌集『光そこここに溢れて』編集逸話」 小野友貴枝
- 「見えない景色」 織本一十未
- 「母の思い出」 横須賀武弘

社会批評入選

- 「憲法九条(2014・7・1)」 anehako
- 「聴覚障害者競技団体はバラリンピックに復帰を！」 徳安利之
- 「考察―在米二十年、主婦によるアメリカとメキシコの関係」 スターム尾田悦子

世の中には力量もあり、真面目でもあり、努力家でもある人がなぜか恵まれないまま人生を終わっていくことがある。それを掬い上げ、報いて残すことの意義は決して浅いものではない。不遇な人とその運命に光を当てることで、その人の生きたことは救われ、あがなわれる。文章にはそういう力がある。この作品はその意味でも好感が持てた。「子供のときの鉛売り」(龍口宏)は、貧しい子供時代に、借金を返すため家にあつた鉛を自ら売りに行くことを素材にしている。借金取りの無慈悲な様子もよく書けており、なんとかお金を工面するために見知らぬ家を訪問して

「買ってこれ」と頼む痛々しさも、よく伝わってくる。そしてその気持ちに応える人の温かさが、人の世の真実を浮かび上がらせてくる。筆者は繰り返しエッセイ賞に応募してくる常連だが、一貫して、社会の底辺で苦勞し堪えて生きる人々の、温かな心の繋がりとその支え合いを描いて、人情の機微が社会と生きることの母胎であることを知らせてくれる。ほのぼのとしたものの残る作品だった。

「生きる」(音楽袖)は、題材が最優秀賞の「五九〇グラムで産んでしまつて」と共通したものを含んでいて、その重さとしては同等以上の素材であるが、それだけでなく、弟の死などの家族の不運や、母親の施設への入所によって、高齢の祖父の介護を一人で背負わなければならなくなつた父親の苦勞、さらに父親は脳梗塞になり、しかも台風による土砂崩れに襲われ、かろうじて救出されるなど、次から次へと困難が重なる事件の累積が、逆に盛りだくさんすぎてテーマを濁らせてしまつた恨みがある。しかしその中でも一筋貫かれた「もがきながらも前を向き転んでも何度でも立ち上がり、泥臭いけれど人間臭く生きる」父親の手の握り返しが、救済となつて大きく心を揺さぶられ、勇気を喚起してくる。七転び八起きの不屈の姿は、たしかに「生きる」ことを鼓舞してくる。整理ができ、文章もわかりやすく流れが出ていれば最優秀賞にもなり得た作品だった。奨励賞も粒揃いで、秀作が多かつた。近藤幹夫氏の

の中で生徒に会うシーンに過去の自殺の記憶が蘇ってくる部分は鮮烈で、筆者がもしこの本質的な部分に腰を据えて書けば、すごいものになる予感を覚えた。こういう過去を呼び覚ますのは、勇気があることではあるが、いつか正面から向かい合うことが多くの人の救いにもなるはずで、できればと希望を抱かずにはいられない。

坂本かつえ氏の「かたわらのバルーン」は、生きるか死ぬかの大手術のとき、そばにほんやりとした存在として見守つていてくれる命の付き人のような感覚を表現していて、生きることの神秘的な領域に触れているのが、深化を感じた。その意味では守藤康次氏の「マサの命」も、タイ人の恋人による命の希求が「カシの木」の死への誘いを断つ行為に、同じように生きることの深さを感じさせた。

筆者が元警察官であり、それがどのように転落と救いの道を辿るか、飾らない文章の中に不思議な迫力と希求がある。社会批評奨励賞の細野耕司氏の「十万年」は核廃棄物の重要な問題を的確に抉り取つていて、またそれに対していかに政府を含む公的な機関、大企業がいい加減な予測と姿勢で処理を進めているか、その問題の大きさと深刻さをよく伝えている。いつかこのツケが日本列島を滅ぼし、世界を破滅させるかもしれない、根本的な領域から考えさせられる提言となつている。こういうことをもつとみんなで真剣に考えるべきという思いを強くした貴重な提言だった。

「駅」、金田一淳氏の「定山溪はつ恋軌道」など過去の記憶のなかに綾織られる美しい情景は、人間の懐かしい心の在処を深く描いて、命の旋律を奏でている。

また今回は失われた肉親への痛切な思いが結晶した作品も多かつた。牧康子氏の「母のアルバム」、濁川慎雄氏の「孝行のしたい時分に」、沖田有氏の「祖母の足音」は、その代表的な作品として、赤裸々に自分と向かい合いつつ、亡くなった人を追懐している姿勢に、運命の不可避を載せて作品の彫りを深くしている。村松佐保氏の「『百年の孤独』を想う」は、断酒をテーマにした作品ではあるが、同じく亡くなった酒好きの父親への痛切な振り返りを乗せたことで、単なる追懐でもなく、断酒の乗り越えでもない、奥行きのある作品になつている。腕を上げた。

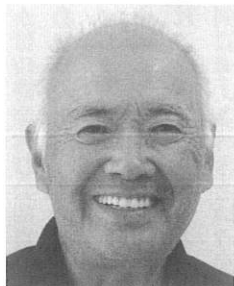
日本の生活底辺を支える人情味と思いやりを肌理細かく描いてほのぼのとした温かみを醸し出しているのは、今年九十六歳の飯島もとめ氏の「闇取引」と九十一歳の瀧沢鈴氏の「気になる人」、そして斉藤はな絵氏の「お地藏さん」だった。読み終わって温かい気持ちに包まれる。

鋭い作品もあつた。川畑和嗣氏の「心の中の鉛」は、フィクションと夢の間を縫って、きわめて峻烈な宗教への批判を含んでいるのが鋭く、小説への端緒として扉を開きつつある点に注目した。また有澤かおり氏の「湯けむりの中」は、ボランティアの日本語教師をしながらのふとした銭湯

文明とは真逆の方向から現代を照射してくる作品「古代の海から」(末永卓幸)も、地球の歴史を乗せつつ太古からの命の繋がりを浮かび上がらせてくれる視点は新鮮で、都会に暮らしている者の眼を開かせてくれる驚きがあつた。享楽のドームに覆われて、窒息しかけている現代人に対し、ショックとなる「十万年」と「古代の海から」の二作だった。

佳作の中にも多くのいい作品があつたが、最も惜しまれるのは竹中水前氏の「アバルトヘイトの火種」である。これはテーマが大きく、体験も加えながら向かい合うには相当な量が必要なので、一〇枚という量では収まり切らなかつた恨みがあつた。そのため中途半端な感じになつて、形を十全に得なかつた印象がある。エイズの問題も途中で消えてしまつている。倍くらい長さになつてもいいので、ぜひ書き加えてしっかりした形にしてほしい。貴重な体験を大事にして完成してもらえれば掲載したい作品である。

総じて、地球的な拡大を感じる一方で、故郷の衰退と、肉親との絆の喪失、闘病の忍耐など、現代の表情がよく窺われる作品群に心を揺さぶられた。また逆に少なくなつたのは、戦争への回顧である。時代とともに変わることは否めないが、大事にすべきものは大事にし、考えるべきものはともによく考えていきたい。その契機として、このエッセイ賞が存続し、みなで共有していくことを確認したい。



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
ター」で第49回農
民文学賞受賞

どうしても書いておきたいこと

水木 亮

文芸思潮のエッセイ審査は久しぶりだが、今回全体的に質が向上していて、読むのが楽しみであった。自分の人生でどうしても書いておきたいことがある。それに取り組むシニア世代が多いことを感じた。

この「文芸思潮」エッセイコンクールはその期待を多く受け入れるもので、他の実力一辺倒のエッセイコンクールと異なるところが特色でもある。そういうゆるやかなエッセイコンクールが、高齢社会を迎えるこれからの時代あってもよいと思う。

最優秀賞二作品のうち、上原翠子さんの「炎」は、今回突出したパワーをもって登場した。交通事故で若い夫と5歳の息子を失ったことを書いたエッセイで、人生にはどう

で書いているが、言いたいことが素直にストレートに書かれていて好感が持てる。新人は表現にこだわらず、まずどうしても書いておきたいことを書く。そのサンプルである見てくれのよい、推敲しました風の飾った文章にない、大事な伝えたいことの力がある。新人は私はそれでよいと思っている。

佳作の長谷川敏久さんの「僕の家にはリスが住んでいい」はイギリスに留学していたとき、屋根裏がうるさく、業者に始末を御願いした。それを歳月を経て作者が書かなければならなかった気持ちが問題である。始末されたのはリスたちだった。そのリスは北アメリカからベットとして輸入されたもので、飽きられて捨てられた経緯があるという。ゆえに作者は今になってリスのことを書いておきたい気持ちになったのだろう。人生はあるときこうすればよかったの連続である。このエッセイはきつと不幸なリス達の供養になるであろう。

佳作の川口翠さんの「『古い』の新しい夢を」は高齢化社会を迎える中で、いかに高齢者が生きるかを、前向きに考えていて、とても好感が持てる。老いをいかに生きるかはみな自分の問題である。

前岡光明さんの「運転免許返納」も高齢者の身近な問題をとらえていてよい。だれもが直面することで、老いたらありえない理想を描くのもよいが、現実の自分の身の回り

しても書いておきたいことがある。まさにそれを象徴しているようなエッセイである。特に仏壇で死者のためにロウソクを灯し、それに語りかければ答えるように炎がゆらぎ、歳月を経てその炎が次第に治まる姿は、その裏にどれだけ主人公が苦しみを乗り越えてきたかを読む者に感じさせる。余計なことを書かず、一気に書いているところに力がある。読む者は主人公によく頑張つて生きてきたねと、声をかけ共感する、まさに最優秀賞にふさわしい作品である。

同じく最優秀賞の小川かをりさんの「五九〇グラムで産んでしまつて」は、極小体重児として生を受けた次男の成長を書いた。これも悩みながら子育てする親の気持ちが伝わってくる。

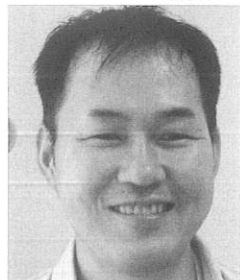
優秀賞では宮尾美明さんの「確かな友情」は愛犬クロにまつわるエピソードである。クロは人間に噛みつく犬で、処分も考えなければならぬほど悩んでいた。しかし、「犬と私の十の約束」という本からその理由を知り、気持ちが変つたことを書いた。その本を読んでよかつたと思う。私自身も噛む犬の気持ちがわからなかつた。本から教えられたのである。このエッセイは、みなさんに是非読んでいただきたい。愛猫、愛犬家には必読の、最優秀賞に劣らない正直なよいエッセイだと思う。

その他私の心に残つたいくつかの作品に触れておきたい。奨励賞の守藤康次さんの「マサの命」は文章も粗く、勢いを見つめ、いかに自分が今日を越えていくか考えたい。私にはどうしても自分の好きな作品というものがあり、それを取り上げてしまう。でもそれはしかたがないことである。審査員にそれぞれの顔があるように、それぞれの人生があるから当たり前である。文章表現の巧拙などはあとから学べばよい。それは所詮飾りである。新人はまず自分の人生でどうしても書いておきたいことを書く。そこから始めたい。

自分も後期高齢者となり、現実をみつめながら、応募者の心に寄り添いたい。

艶笑唄
水木 亮

歌えば命の泉わく！
労働の中で生れ、育ち、歌い継がれ、人々を元気づけてきた艶笑唄の数々——これらの唄はまぎれもない日本の文化遺産だ。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第
91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ハネムーンきどり」(三
田文学)他「長者屋敷の
寝られぬ座敷」(合作)で
佐々木善喜賞など 構成作
家としても活動中

復活の「炎」

都築隆広

遊びとライター業にかまけ、純文学を七年も発表していなかった。

だが、このたび「三田文学」夏季号に純文学短編「ご眷属様ジャーニー」が七年ぶりに掲載されている。いきなり他誌掲載作の宣伝で恐縮でござる。丸谷才一は十年に一度しか長編を上梓しなかったし、寡作で知られる米国の作家、ハロルド・プロドキーは二冊目の本を書くのに三十年ぐらいかかった。私は短編を書くのに七年かかる。それに比べたら、一年、エッセイ賞を休むなんてたいしたことではないのかも知れない。しかし、この意外と早い復活劇を投稿者様よりもずっと喜んだのは我々、選考委員一同だったろう。私は膨大な量の作品を一気読みして帯状疱疹が出たり

もしたが、やったー、選考会後のビールがうまい。

さて、久々の当選作は二作、「炎」と「五九〇グラムで産んでしまつて」。ただ、優秀賞の「汽笛のなく家」も個人的には推薦していた。ところが、選考委員の先生方から「この文章、なんか変だよ」とあちこち指摘され、「あ、優秀賞でいいつす」と怯んでしまった。タイトルも文学的で、親子の対立のドラマの果てに、認知症となる父の生々しい生活描写が凄まじく、シリアスな作風ながらオッパイ好きの男まで登場してきて読者を惑わせる。間違いなく当選作レベルだが、推敲不足が玉に瑕であった。

一方、当選作「炎」は投稿時、「交通事故と炎」という題名だった。これだと露骨なまでに「交通事故」が前面に出てしまうので、改題することを条件に当選作となった。私も高得点を付けたのだけれど、作品の質とは異なる部分が気にかかった。それは作者の上原さんには申し訳ないが、「結局、壮絶な体験をした人じゃないと、エッセイ賞は獲れないんじゃないか」という諦めに近い感想を読者が洩らすことへの危惧である。壮絶な体験ばかりが残つてしまふのはエッセイ賞の傾向であり、今後の課題なのかも知れなかった。

同じく、「五九〇グラムで産んでしまつて」も極小体重児を育てるといふ、体験先行型のエッセイ。とはいえ、チューブを百メートル繋げて子供を遊ばせたり、空気が読

めない担任教師のせいで学校にて演説しなければならなかったり、この作品でしか読めないエピソードがふんだんに散りばめられている。オリジナリティを感じた。

優秀賞も力作揃いだ。狂暴な犬を飼ってしまった日々を描く「確かな友情」はステイヴン・キングのホラー小説を読むようで、理解不能な犬の怖さがある。とはいえ、狂暴さの理由がわかるラストは心があたたまるも、少し尻すぼみだった。犬を畏怖すべき存在にしておいた方が、吉村昭の「罷嵐」さながらに、荘嚴なる獣の猛威が描けただろうに。

「タエさんと天ぶら鍋」は懐かしさを感じる作品で、審査員に概ね好評だった。同じく「ピロピロ笛」は難病という過酷な境遇にも明るさを見出す話で、ピロピロ笛に眼をつけたところがとにかく、アイデア賞。同「子供のときの鉛売り」は、これまた懐かしさが漂う農村での鉛売り体験を綴っていて、まるで自分が鉛売りをしているかのような不安げな臨場感があった。その次、「生きる」は私の好きな黒澤映画とタイトルを同じくする。未熟児の双子の妊娠から始まる災難のオンパレード。エッセイ賞においても、ここまで短い文中に不幸を詰め込んで来た人は稀だが、結末に救いがある。

奨励賞では「マサの命」が良かった。正直、文章は上手くない。しかし、今や投稿者の過半数がプロに肉薄する文

章力なので、素朴な文体がかえって好ましい。つげ義春の劇画を彷彿とさせる人間苦の世界が、カタルシスを醸す。

ところで、審査員を務めていると「エッセイ賞の応募作を作るときのコツは？」とよく人に聞かれる。それは、松本人志が行っている、あのバラエティ番組さながらに「一生に一度のすべらない話を書く」か「その体験すら凌ぐ構成員や文章力を持つ」ことではないだろうか。特に前者の占める割合は大きく、一生に何度も、すべらない話を書かねばならないプロ作家やライター、芸人では到達しえない朴訥さや率直さがないと、この賞は受賞できない。それゆえに常連投稿者は技術のみになると苦境に立たされる。私が七年、短編が書けなかった理由も、似たようなものだった。

さて、エッセイ賞が不死鳥の如く蘇つたのは喜ばしい。この先も続くかは読者及び投稿者の皆様と、五十嵐編集長次第である。願わくば、この「炎」が易々と消えず、熱風を帯びて燃え盛ることを祈る。

Essay



第14回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）。

応募資格●不問

応募規定●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用のこと／B4は失格）。※応募審査料1800円を郵便為替で同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（2019第14回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑨応募審査料1800円を郵便為替などで同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは16USドルを同封。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。これらが厳守されていないものは失格となる。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

※恐縮ですが応募審査料1800円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品



選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2019年3月30日（当日消印有効）※1カ月早くなっていますので御注意ください。

発表●予選通過作品発表は2019年6月末発売の「文芸思潮」72号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・受賞作は2019年9月末発売の「文芸思潮」73号に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。



選考会風景

2018/07/29



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」
タイ・カンボジア国境の難民村。射撃した砲弾で燃焼になった数多くの死体が散らしていた。

健友館

五十嵐勉カンボジア難民小説第2弾
御注文はアジア文化社まで
1600円

五九〇グラムで産んでしまったって

小川かをり

この話は二十年前のことであるが、語れるようになってのは最近のことである。次男はたったの五九〇グラムでこの世に生まれた。母親である私のせいで極小低体重児として生まれてきてしまった。まだ肺ができていない状態だったので、人工呼吸器で無理矢理に濃度の濃い酸素で呼吸させられたために肺が線維化して固くなり、心臓肺高血圧症（肺性心）の状態になっていた。だから、長い入院の間も何度も命が危うくなったし、一歳で退院してからもさらに二年もの間在宅酸素を使わなければならなかった。外出時も寝るときもずっと酸素のチューブを鼻につけていた。

「ひとたび線維化してしまった肺はもうもとは戻らない。でも小さいときの肺は運動すれば大きくなる。新しく出来

た肺は良い肺のはずだ」

医師のその言葉だけが頼りだった。自宅に酸素を作る機械を設置してこの子は長い入院生活を終えた。

それからというもの、私はチューブを何本も何本も繋いで一〇〇メートルにまで繋いで、次男が遠くまで走れるようにした。お兄ちゃんたちが遊ぶのについて行きたくて次男は一日中、家の外を走り回った。家の中の酸素製造機からその長い管を引きずって道路を走り回り、公園まで足を伸ばせば、私は酸素ポンベを背負ってついて回った。いろんな障害物を避けるために管をちぎっては繋ぎ、またちぎって、自由な遊びをじゃましないように気を配った。特にジャングルジムの中に入ったときは大変だった。

次男はその状態でプールにも行った。私はポンベを背

負っていっしょにプールに入り、子どもたちをかき分けてチューブに繋がれてついて回った。調子に乗って泳ぐと酸素不足になり、みるみる顔が青くなる。すると吐いてしまうので、この子とポンベを抱えて水場まで走らねばならなかった。

そんな努力が実って次男の肺は日に日に良くなっていて、担当医師を喜ばせた。中国人教授の友人も細胞の再生に良いという漢方を本国からせつせと送ってくれた。私はそれをクコやドクダミと一緒にお茶に煮出して毎日飲ませたりもした。でも何が一番功を奏したのかと問われれば、それは多分、兄妹の存在だったろう。次男はお兄ちゃんが大好きだったし、妹にだけは走るのを負けたくないらしくて、必死でかけっこをする日々だった。

退院時に、次男の心臓肺高血圧を測った循環器系の医師はこういった。

「この子の肺は日本で一番悪い。ダントツピリの肺の状態だと思って下さい。まあ少しずつ良くなったとしても、普通に家庭内で生活できる程度です。まさか富士山へ登れるようにまでではないかと思って下さい」

そこで「なにくそ」と思い、一家で富士山に登る計画を立てた。次男が小学校四年生になったら一家で富士山に登ろうという目標だ。そのために毎週、山に連れて行った。次男は辛坊強かった。そして山が好きなようだった。だか

らなのか、今でも大学で山岳部に入っている。

で、とうとう三人の子どもが中一、小四、小一の時に一家で富士山に登って山頂に立った。母親の私が一番バテたので、次男が気遣ってこう言ってくれたものだ。

「お母さん、しんどければこの酸素のチューブを吸うといよ。杖も貸してあげるよ」

私は万一の時のためにと背負っていった酸素ポンベを自分に勧められ、次男に気遣われて杖まで借りてへとへとになって登ったけれども、次男は一言も弱音を吐かずに黙々と登頂した。妹が煽ったからかもしれない。兄が黙って荷物を負ってやったからかもしれない。私はそんな兄弟を本当に誇らしく思ったものだった。

そんな秋に小学校でまたまた試験がきた。「2分の1成人式」というのがその頃、小学校で流行りだった。小四の一〇歳の行事らしい。クラスにお母さんたちが行って、自分の子が生まれた時の写真を見せながら、誕生時の様子を発表するという。その発表担当になぜか、当時の担任の男性の先生が私を指名なさった。数人しか指名されていないというのに、なんでわざわざ私にするんだらう？ 無神経な、と私は心底、気が滅入った。

実は学校には次男の生まれのことも、今までの経緯も全く話していなかった。変な憶測をされるのではないかと、将来結婚に差し障るのではないかと、とか、担任に

もどうせだめな子だなんて色眼鏡で見られるのではないか？ とか、周りの子にいじめられるに違いないとか、色々一人で勝手に警戒していたのだった。飛び抜けて小さいのだから見劣りしてはいけないと神経を使い、服も膨らむようなものを着せて、痩せているのを隠してきたつもりだった。だから、生まれた時の写真を見せて話をするなんてとんでもないことだった。だいたい写真がない。生きるか死ぬかの状態で写真は撮る気がしなかった。私は人前で話をするのはもともと教員をしていたこともあってむしろ得意なのに、いくら考えてもどう話してよいか一言も思いつかず、一週間が過ぎてしまっていた。担任にいくらお断りしても聞き入れてもらえない。

「お母さん！ 自分の息子が見えている前で、あなたが生まれてどんだけ嬉しかったのかって話してあげないと駄目ですよ！ 息子さんは楽しみにしています」

ええーっ、もう喋っちゃったのか！ と私もまた慌てる。でも本当にその日のその時まで私は頭が真っ白でとても話せるとは思えなかった。写真もごまかして一歳の時にたまたま着替えてデューブを外した瞬間にパチリとやった写真を持っていった。

お産のときのことは思い出すだけでも身震いするような、まだまだトラウマ状態だったのに、どう、何を喋ればいいのか途方にくれていたけれど、追い詰められて、話し出す

「大丈夫、必ずすごい人間に育つから。自分の運を信じなさい」って。

それを言われたときには私はもう目が見えていなかったらしく、周りが真夜中のように真っ暗だったのをよく覚えています。なんで暗闇から旦那の声が聞えるんだろ？ とか、わけがわからなくなっていました。それでも、私は帝王切開で自分の子宮からこの子を取り出す時になったら、目を皿のようにして見ていました。手術のライトって銀のお皿みたいになっていてよく写って見えるのです。腹の皮を切って子宮膜が出てきてそれも切って医者の手が突っ込まれてこの子を取り出されました。……そうしたら痩せてはいたけれどもこの子は可愛い顔をして出てきて、こっちに顔を向けて手を思いつきり振ってくれたのです。私はお腹にいっぱい鉗子をつけたままガバツと起き上がってこの子の顔を思いつきり見ました。するとオギャーと泣いているのですが顔は笑って手を振ってくれているのです。そうハッキリ見えました。後はお医者さんたちが私を押さえつけて慌てているのでこう叫びました。

「この子を早く助けて！ 私はいいから！ 早くその子を助けて！ ほら、笑ってる！」ってね。

直前まで頭が真っ白だった割にはよくこんなにもベラベラ喋れたものだと思うぐらいに喋りまくって気が付いた。自分でこういう記憶は封印していたらしく、初めてありあ

直前になったら、いきなりこんな言葉が浮かんできた。

「この子は日本でダントツビリの肺だと生まれた時に言われたのです。それでもこの夏、富士山に登頂してきました。皆さんは富士山に登ったことはありませんか？ 普通の肺の人でもきついくらいです。それをこの子は登り切ったのです。つまり普通の人以上の肺になったということです。これは考えてみるとすごいことです。ピリから普通以上になったということは、普通の肺の人だったらオリンピック選手の肺になるくらいの努力をしたということです」

一旦話したら生まれたときのことを思い出してきて堰を切ったように喋って止まらなくなった。

実はこの子はとても小さく生まれてしまいました。それはこの子のせいじゃありません。まったくもって母親である私が不注意だったのです。町医者は生まれる寸前にこう言いました。

「こんなに小さく生まれたのではまともに育たない。親切で言うけれど、そこいらを歩き回って産み落としてから一時間経ったらここに持つてきなさい。死亡診断書を書いてあげるから。助けられないほうがいいんだよ」って。

でも私は大きな病院に運んでもらって「助けてください、手術をして良い状態でこの子を取り出して下さい」と医者に頼んだのです。この子のお父さんが駆けつけてきてこう言ったからです。

りと思いついていた。とどこどころ変なところもあるのかもしれないと思う。それまでだれにも喋ったことはなかったし、次男が何と思うだろうかとも思ったし、聞いた人がみな自分を責めるだろうとも思っていた。だれより自分が責めていたし。でも、気がつく子どもたちはシーンとして聞いていてくれたし、何よりも次男が嬉しそうな目をしていていた。

担任が無理矢理にでも私を指名して喋らせてくれたわけが、喋った当時の私にはわからなかった。男の先生だから母親の気持ちかわからなくて無茶振りをしたのだろうとか思っただけでいいくらいだ。でも、今こうして振り返ってみると、あの担任はわかっていたんだなあと思う。自分一人で苦労したような話を作ってきたけれども、それは違ってくる。話してみてもやっとな気付いたのは、いつも周りの人々に助けられていたってことだ。

私はいつも周りの人に助けられていたのだった。まず、この子を産むと決定できたのはこの子の父親の後押しのおかげだった。この子の担当医は危険な時には幾晩も病院に泊まり込んでつきっきりで診てくれた。良くなるよと自分の懐にこの子を入れて温めながら処置をしてくれていた。

「今、徹夜明け。この子といっしょに屋上で朝日を見てきちゃった」

なんて言ってる。

担当の看護師はいつもこの子を自慢してくれた。
 「どうよ、こんなに可愛い子は他にはいないでしょう」って。
 私はまさかこんな産み方をした子が褒められるとは思って
 いなかったの、本当に嬉しかったものだ。
 そうして近所の人々、プールのお兄さん、プールで吐き
 そうになっていると、嫌な顔ひとつせずこの子を抱えて
 一緒に走ってくれた。
 そして兄弟の力、祖父母の応援、そして無理やり私に悟
 らせた担任、皆の力をいつも受けて、この子はぐんぐん育っ
 てきたのだった。それを忘れて一人でこの子の周りに城壁
 を作って、だれもこの子に触れさせないぞ！ なんて思っ
 て一人いくさ状態だったのは私だった。
 なんて馬鹿なことをしていたのだろう！ 気がつくとも、
 四面楚歌どころか、城外は応援歌の合唱だった。そしてだ
 れよりも私を救ってくれたのは、他ならぬこの子だった。
 だれの予想よりもたくましく落ち着いた辛坊強いかしい
 子に育って、今や見上げるような青年になった。島根大学
 生物資源学部在籍していて写真部と山岳部で友だちに囲
 まれて楽しくやっている。生まれてよかったと言う顔をし
 てくれると、私は許してもらった気になる。だれよりもこ
 の子に救われていた。

受賞の言葉

小川かをり

このエッセーに応募しようと思って原稿を書き出した最初の第一
 稿はまだ自分の苦勞話を書いてきた。自分一人で苦勞して育てたよ
 うな書きっぷりだった。でもちよつと違うなど読み返し、何度も書
 き直して第三稿、第四稿になってやっと気づいてきた。みんなのお
 かげでこの子は育てられたんだということに。母親が至らなかつた
 分は周囲の強力な味方がこの子を育ててくれた。その人々を味方に
 つけた総大将はこの子だった。私は寄るな触るな私一人で守るとい
 うような気持ちだったからこそ辛かったただけだった。大変愚かだっ
 たことに今ごろ気付いたのは遅きにすぎる。

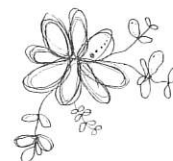
その大勢の味方に気が付かせてくれたのが、このエッセー応募だっ
 た。何度も綴りながら、私は学んだ。書きに書くうちに心の底から
 自分の観念が打ち破られていった。自分の中の石のようなものを打
 ち砕いて粉にして練って何か柔らかなものに生まれ変わらせること
 ができた。同じ出来事でも第一稿で書いたのと正反対の言葉を最後
 には書いていた。「興味津々の眼差し」だったんじゃないかって、あれ
 は「心配して見守っていてくれた眼差し」だったのか！ というふ
 うに。このエッセー応募のお蔭で、振り返って学べたことに感謝し
 ている。次回はこの夏筑波大学院生物学科に合格し、留学もする気
 ではりきっている。生まれてきてよかったという顔をしてくれてい
 る、小さく生まれてしまった子たち、みんながんばれ！



小川かをり

おがわ かをり

1959年生まれ
 84～85大宮市立中学教諭
 97より
 世田谷中央看護専門学校
 「体育と感性」講座 非常勤
 講師 現職
 2001早稲田大学教育学部非
 常勤講師（生涯レクリエー
 ション・スポーツ論）現職
 14年11月～
 明星学苑中学校高等学校
 保健体育非常勤講師現職



小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説
 する小説指導書

小説作法 改訂増刷版

小説の書き方

作家を志す人のために

五十嵐 勉

アジア文化社

送料共 1000 円 (税込)
 御注文はアジア文化社まで

文芸思潮文庫

明日のブルドッグ

Takahashi Motomu

高橋三千綱

121 文芸思潮文庫 540 円 (税込/送料共)

短編小説集

雪女郎

原石寛

原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいた美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無敵に散り、踏み込まれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って舞舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと愛をも含んだ人間の美の影への鎮魂である。

アジア文化社

— 五十嵐勉

原石寛畢生の短編小説集
 1600 円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

炎

上原翠子 すいこ

市立の総合病院で看護婦として忙しく働いていた三十五歳のころ、私には五歳の子供がいた。剛つよしという名の元氣な子だった。幼いのに、いつも自分から進んでお手伝いをしてくれた。

私の主人は運送会社の経理部長をしていた。まだ三十八歳と若かったが、出世して会社のホープと見られていた。私は主人を「努つとむさん」と呼んでいた。

朝七時四十分になると、三人そろって忙しい。主人は車で市街に出勤、八時三十分から会社が始まる。私も車に乗って通勤、同じ時刻から病院の仕事が始まる。

剛を幼稚園に送るのは、主人の役割。剛は幼稚園のあと、預かり塾のようなどころへ行かせ、帰りはバスに乗って一

供にとっては洗濯物は重いはずだ。私は手を貸して、洗い終わった洗濯物の籠をいっしょにしっかり支えて物干し場に行く。剛と並んで午前の陽の光を浴びて洗濯物を干すのだった。

剛は大福餅が好きで、それをあげると大喜びだった。

主人も私も好物なので、家には大福餅が欠かせなかった。

大福を頬張りながら、いつも剛は言っていた。

「大福餅は、やわらかくて、丸くて、甘いから、『ほっぺ餅』っていうんだよね」

目を細めて言うそのほっぺが、ほんとうに大福のようで、かわいらしかった。

剛はまたお父さんと遊ぶのが好きだった。主人も、会社でのハードな毎日の仕事の疲れをのんびりと剛と遊ぶことで癒していた。

土曜日になると、剛が言った。

「早く夕方にならないかな。お父さんとキャッチボールするんだ。バットとグローブを用意しとかなくちゃ」と、ワクワクする表情で言った。

やがて主人が帰ってきて、素早く着替えをすると二階からドタドタと降りてくる。

「よし、剛。さあ、行こうか。お待たせだったね」

そう言って剛の頭を撫でると近くの公園へ出て行く。私は夕食の支度に取りかかる。野菜サラダに青菜の炒め物、

人で帰ってくる。月曜から金曜まではこのサイクルだ。三人が揃うことは、土曜日・日曜日くらいだった。

週末になると家族みんなが揃うので、剛は大はしゃぎになる。自分では大サービスのつもりで、幼いのに「洗濯物はまかせといて。ボクが干してくるよ」と言ってくれる。私はその気持ちがうれしくて、弾むように答える。

「さすが剛くん、来年から一年生になるんだもんね。すごいね。重いけど、だいじょうぶ？ ありがとうね」

剛は生意気に言葉を返してくる。

「おかあさん、来年からなんて言わなくていいよ。だってボク、今でも言われたら何でもできるもん」

剛は言葉通りに、重い洗濯物を抱えようとして、洗濯機の方へ行く。剛は主人に似て背が高い。それでも五歳の子

主人の酒のつまみにカジキとマグロの刺身、そしてメインの剛の好きなカレーは時間をかけてたっぷり煮込む。三人前をきれいにテーブルに並べて準備万端。二人の帰りを待つ。

やがて二人が元気な声で「ただいまー」と玄関の扉を勢いよく開ける。テーブルに坐ると、スプーンでカレーを大きく掬って口に運びながら、剛は興奮気味に言う。

「あのね。今日は、お父さんが僕の投げたボールを打ったよ。すごく当たりがよくて、向こうの隣のチームの中まで飛んでっちゃったんだよ。ねえ、お父さん」

「うん、よく飛んだね。剛の投げた球がよかったんだよ。ストライク。ど真ん中だったんだ」

私は話に乗って、言う。

「へーえ、そんなに飛んだの。お母さんも見に行けばよかったな。じゃあ、ホームランに乾杯しましょ」

主人のグラスにビールをつぎ、泡が昇ってきたところで、私もちよつとだけ入れる。剛はコーラだ。

「カンパニー」と声が揃う。みんなで笑い合って料理を楽しむ。剛も主人もキャッチボールをして気分がいいのだ。話が弾み、食欲も増す。

ゴールデンウィークの最後の日だった。二人でペットショップへ行き、かわいい柴犬がいたので、それをたいそう気に入って、二人で飼いたいと私に言ってきた。もうす

に予約を取り付けてきたという。

「いいわよ。でも、犬を飼うには犬のお家が必要ね」

と私が言うと、「じゃあ、犬小屋を作る。パパといっしょに」と満面の笑顔で剛が答えた。

その日は日曜日だったが、総合病院に勤める私は当直で出勤だった。私はこんなに天気の良い日には、家にいられたらすることが山ほどあるのにと、愚痴めいた独り言を言いながら、洗濯を済ませた。朝早くからいろいろと雑事を済ませ、九時三十分には家を出た。

一方主人と剛は、犬を迎えるための犬小屋を作ろうとはりきっていた。板材や道具をホームセンターへ買いに行くことになっていった。どんな犬小屋ができるのだろう、どんな柴犬なのだろうと、私は楽しみにしていた。

二人は十時頃出ると言っていた。二人揃ってジャンパー姿だった。息子は「早く行こう」と父にせがんでいる。剛が父を引っ張る手を見ながら、

「私は先に行つてまあす。あなたたちも十分車に気をつけてね」と玄関を出て車を発進させた。

病院の私の仕事場は、外科の混合病棟である。集中治療室といった設備もない時代なので、忙しさが他の病棟と全くと言っていいほど違う。私はあちこちからの声に追いつてられるように病棟回りをしていた。

言った。

「奥さんは看護婦さん？」

「ハイ」

「どこの病院ですか」

「市立総合病院です」

「じゃ、そこに運びましょう」

車に近づくと、主人の車の形は原型をとどめていなかった。後方はダンブの前部でグシャッと押しつぶされている。主人の顔面は血がベッタリと流れていた。息子の方も、顔面を強打したらしく、額から眼にかけてポコッと引っ込んでいて、そこが流れる血と混ざりあい、ほっぺの肉の潰れが生々しかった。

私は真つ先にブラブラになった息子の左腕を握り締めた。体の末梢なのに、まだ温かった。そのとき、私の目に溢れるものがあり、どうしようもなかった。

私はパトカーの中で、病棟で死者の最後の処置を終えて、霊安室へ運んでいくときの同僚同士の沈黙をなぜか思い浮かべた。主人と息子がその当事者になる。ただ黙々と歩き、霊安室では、一本の蠟燭と、お線香を立て、部屋を出る。廊下に出て、「お疲れさまでした」とその時になつて初めて言葉を交わす……それが主人と息子に対して行われる……そんなことをぼんやりと考えていた。

車が病院に着いた。外来、当直の係が来て、あとは任せ

突然ナースコールで私の名前が呼ばれた。至急詰所まで戻るようにとのことだった。

戻ると、電話の受話器が外されたままになっている。警察から「大至急」との電話がかかっていた。受話器を取ると、切迫した声だった。

「もしもし、こちら警察の事故係です。上原さんですね」

「ハイ」

「今すぐ大橋の所へ来てください。御主人とお子さんがダンブに押しつぶされて、事故に遭われています」

私は、仰天した。足が震えた。どうということだろう。何があったのか――。

婦長さんに伝えて了解を得ると、白衣の上にコートをひっかけてタクシーに乗った。

ほとんど一〇分で現場に到着した。天幕があり、その先に車が見えた。ダンブと電柱に挟まれて、乗用車がV字型に立っている。

V字型の屈折したところで息子の腕がドアに挟まり、ブラブラしているのが見えた。主人の頭はフロントガラスまで飛んだのか、その周囲のガラスが四方八方にヒビ割れていた。頭がハンドルにまだひっかかっていた。

「それでは病院に運びます。奥さん、いっしょに来てください」

警察の人は、私がコートの下に白衣を着ているのを見て

ることになった。空いている手術室で、同僚が体を拭き、病院の寝巻に着せ替えて、霊安室に運ぶ。そこで一晩を過ごすはずだった。

私はいったん我が家に帰って、食事を済ませ、入浴をしてから、息子と主人の待つ病院へ戻ることにした。通夜なのだから、きつと病院の同僚たちも少なからず来てくれる。主人の方も経理部長だから、部下や上役が通勤帰りに寄るかもしれない。とにかく眠かった。二、三時間寝よう。目覚まし時計をかけて眠りに就いた。

午後六時前に時計のベルで目を覚ました私は、着替えを済ませると、車を走らせた。

病院に着くと、私は飛ぶようにして息子と主人がいる霊安室へと向かった。時計は六時を回っていた。何人か、すでに見送りに来てくれたらしく、線香が手向けられていた。

私は遺体の二人に話しかけた。

「努さん、剛さん、二人とも痛かったですよ。こんなことになって……」

「今ね、家族三人でいるのよ。黙ってないで何とか言ってください。ボクも痛かったですよ。だって、ボクの腕が、車のドアに挟まっていたんだもん。痛くてもどうしようもできなかつたよね。その右顔面を強打したのよね。あつという間の出来事だったよね」

二人に話しかけると、泣きながらも心が安らぐのを感じ

た。

「ごめんね。代われるものなら、代わってあげたい。今はその思いでいっぱい」

私は心の中でずっと会話を続け、あと一時間で消灯の九時になるのに気づいた。

「明日の朝早くに葬儀車が迎えに来ます。もう朝は会えないので、今日は一時間ずらしてもらいました」と私は時計を見ながら、主人と剛に報告した。

「明日はみんなが来る前に、葬儀車が迎えに来ます。私もこれでお別れになります」

「努さん、長い間お世話になりました。あの世でも剛をよろしくお願ひしますね。それから、剛くんへ。学校はあの世で行ってください。お父さんの言うことをしっかり守って、立派な一年生になってね。いつもあなたのことを忘れてない。どこからでも見守っているよ」

私は清拭された二人の顔を、何度も何度も、諦めきれずにもう動かないことを確かめながら、別れを告げた。そのままずっと二人の顔を眺めていたかった。

しかし時間が来て、そこを去らなければならなかった。私は看護婦の詰所に最後顔を出しておかなければと思ひ、同僚に向かって何時間ぶりに声を出した。

「お疲れさま。私はこれで帰ります。後のこと、どうかよろしくお願ひします」

主人に「努さん、剛くん」と声を出して呼びかけると、炎はやっと静まり、元の大きさになった。

私はその炎の揺れに、主人と我が子が、この世に留まり、いつまでも私のそばに付き添っている気配を感じた。この世に未練を残し、天国に行かずに、私のそばに付き添おうとしている気がした。

私は二人の遺影の前で、ロウソクの炎を燈して会話をするようになった。

「そちらはどうですか」とか、「きょうはこんなことがありましたよ」とか声に出して話しかける。「淋しい」とか「心細い」とか言うとき、炎は燃え上がって、大きく揺れる。

事故から一年経ったとき、私は足が悪くなり、動きにくくなったこともあって、大きな仏壇とは別に、自分の部屋に小さな仏壇を作った。そこで二人に話しかける。そこだとだれにも聞こえないはずだった。小さな、私だけの仏壇に向かって、そしてロウソクの炎に向かって、話しかけ、語り続ける。あの時のことが忘れられず、事故のときのことを話し始めると、ロウソクの炎はいっそう高く燃えて、揺れ踊る。

他人から見ると、奇妙な独り言にしか聞こえないだろう。頭がおかしくなっていると見られるかもしれない。でも私には大事な死者との交信であり、会話だった。

翌日と翌々日の二日間、私は休みをもらって家にいた。その間、泣きながら主人の部屋と剛の部屋を片付けた。二人がもう戻ってこない。もうこの世に姿を現すことがないと思うと、身が割かれそうだった。ここにいるのが辛く、一人でいるのが怖かった。

二人の死にはあまりにも強烈で、私は一人この世に残された気がした。

やがて初七日が来て、お寺でお経をあげてもらうことになった。花はユリがいらしい。二人の好きだった大福餅も供えた。いろいろ近所の方から聞いて、それに従ってきれいな花を添え、お経をあげてもらった。

その夜、私は二人の位牌の前で、ロウソクを点けた。その炎を見ながら、ソフトボールをしていた二人の姿を鮮やかに思い出した。剛の腕がボールを投げた。そのときだった。炎が普通より倍も高く燃え上がり、大きく揺れた。炎は踊っているようにも、喋っているようにも見えた。それは私が話しかけるたびに、高く波打って、三〇センチくらい高く膨らんで揺れるのだった。電灯を点けているのにもかかわらず、周囲全体が暗くなって、ただ炎だけが大きく明るくなる。私が二人のことを思っただけに襲われ、泣くと、いっそう波打ち、高く上がってそのまま大きく留まる。私の哀しみに呼応して、応えてくるようだった。私が

こんな生活をもう止めにしなければ、とも思った。自分の一人の世界ではなく、私には、患者が待っている、と意を固くした。

五年くらいしてから、少しずつ炎は治まるようになってきた。ときおり少し高く燃え上がるくらいに穏やかになってきた。私は努さんと剛くんがこの世への未練を断ち切ろうとしていると思っただ。

事故から三十年経ったこの頃では、もうロウソクを点けて話しかけても、かすかに揺れるだけになってきた。もう二人とも天国へ行き、向こうで幸せな生活を送っているのかもしれない。あの世で、主人は白髪になり、剛も結婚して子供も大きくなっているのかもしれない。私は寂しいけれど、ほっとした気持ちにもなっている。二人して辿り着くべきところに辿り着いたのだと思う。

私ももうあの世に行き、二人の所へ行く時が近づいている。二人がああ世で待っている気がする。

遠くにぞ 一人残して旅立った

二人の面影

あの世で会えるや

長い間自分の中に閉じ込めていたこの記憶を文章にするのは、たいへん勇気のいることでした。思い出したくない、触れてはならないことのように、自分の中に蓋をしておきました。でも、あるきっかけが、その蓋を開けるのを助けてくれました。

かかりつけの病院の待合室で週刊誌をバラバラとめくっていたとき、あるページに「交通事故」の文字が目に残りました。それを見て、自分のあの記憶もこのまま自分の闇の奥に葬っておいてはいけないのではないか、という気持ちが湧きました。三十年以上の時の経過と、もう自分も先がないことが、背を押してくれました。

いざ書き始めてみると、意外にも自然に溢れ出るように

どっと出て来て、一気に書くことができました。でも、やはり辛くて涙なしには書けませんでした。

推敲の段階では、未熟さゆえに、何度も落胆して完成を諦めかけました。でも、どうしても書いておかねばならないと思いついては、また取り組みました。

受賞の連絡が来たとき、ほんとうかしらと思いましたが、こんなに大きな賞をいただいて、夢のようです。死んだ夫と息子がだれよりも喜んでくれていると思います。剛くん、努さん、よかったね。

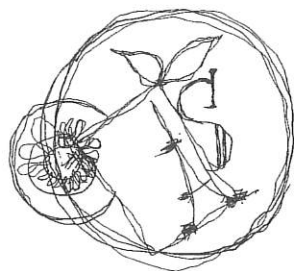
いまあらためて、賞の重みを感じています。今後はますます勉強に精進し、何事にも挫けない精神力で努力していく覚悟です。ほんとうにありがとうございます。心から御礼申し上げます。



上原翠子

うへはら すいこ

- 1941 熊本県生まれ
60 人吉準看護学校卒業
62 熊本県立桜ヶ丘結核療養所勤務
65 熊本高等看護学校卒業
72 大阪市立病院勤務
76 大阪府坂南中央総合病院勤務
その後熊本県立総合病院など熊本県内の病院に勤務
2007 退職 現在に至る
熊本市中央区大江本町在住



汽笛のなく家

植村恵子

家は児童養護施設「マリア園」から石畳の道を上りつめたところにあった。

長い間、帰らなかった家だった。どうして親と絶縁したのか、自分でもうまく説明ができない。ただ、私の胸中に巣喰った得体の知れない恐怖が、私を父と母のいる家から遠ざけたのだ。親の期待に応えないのに応えられない自分に対する焦立ちと虚しさが私を追い込んだ。ならば親から離れて一人で生きようと。なんと

いう家ではないのに家は私に圧力をかけつづけた。だが、父と母がいなくなってみると、そこには穏やかな空気が静かに横たわっていた。

天窓から落ちてくる光が玄関の敷石を照らし広がって

た。静かに横たわる穏やかな空気は家の奥へと少しづつ流れていた。

その床の間に私の雛人形があった。古ぼけた黒い木枠はがたがたで、埃で曇ったガラスがなんとなく嵌まっていた。内裏雛と三人官女は薄ぼんやりした顔立ちでひっそりと並んでいた。優しい品の良い顔はどこか母に似ていた。母は細面の静かに笑う美しい人だった。私は富山県の伏木で生まれた。

そのころ父はまだ外国航路の一等航海士で私と母と兄二人は港の近くの家屋と家屋に挟まれた借家に住んでいた。寒い日だったか、日差しの強い日だったか、どこをどう歩いたのか覚えていない。唯、「やっばり、これにしますの」と、娘の幸せを願う雛人形を町中を探しまわりへと

へと疲れ切った母の赤ら顔と、ずっと遠くまで続く坂がすっかり夕焼け色に染まっていたことを今も私はよく覚えている。それを見上げた私はまだおとなしい手のかからない子どもだった。いつだってどんな時も娘を思う母の気持ち、私の心を明るくした。

私には思春期から赤面恐怖があった。

ただ、私のそれは人前で上がったたり緊張のため恥ずかしさに顔を赤らめるのとは異なり、もともとの赤ら顔がちよっとした気温の変化で、のぼせた猿みたいになるのだ。顔が赤らむことが怖かった。

それがどんなことより恐ろしい事態に思えて、人前に出るのが苦痛だった。友人も少なく、ごく限られた交友関係しか持てなかった。

どんなに撥ね返そうとしても、この辛い惨めな赤い顔を見るたび、私は劣等感に打ちのめされた。「怖い、怖い」と私の中の『私』が言いかけたとき、私は急いで耳を塞ぐうとするのだが、『私』の声はだんだん大きくなり私はその度に、激しい不安と絶望感に全身が包まれていった。

大学を中退した私は家に引き籠った。どうやったら、この制縛状態から抜け出せるのだろうかと考えると涙がこぼれ落ちた。

赤ら顔は母譲りだった。私はそのことでしばしば母を烈

しく責めた。

父は、鶴の港、長崎港の水先案内人だった。

船舶が特定の水域を航行、着岸させるとき、ブリッジに入り針路を確認しながら操舵手とエンジンを指揮し無線でタグボートに指示をする仕事だ。

ずば抜けた技量で港の発展に貢献したのだが、父は好き嫌いの激しい、感情を剥き出しにする人だった。いつも強い意志の力さえあれば何事をも成し遂げられると力説する父にとって、私の不安発作への恐怖の訴えなど、ただただ父を焦立たせる戯言だった。

それなりに期待していた娘への失望が、私と父との関係をぎくしゃくさせ「私」という存在すら煩わしく感じていることが父の目に見て取れた。母はそういう父と言い争いながらも別れることもできず、おるおると私と父の板挟みになるばかりだった。

日に日に、私がこんなことになったのは母の赤ら顔のせいでと考えるようになった。

母の情愛の深さまでが疎ましく思えた。

「お前など、生まれなければよかった」

あるとき父がぼつりと言った。

私はふらふらと立ち上がった。そして、家を出る決心をした。

といっても情緒不安定の私が世の中でひとりで生きてい

けるとは思えなかった。けれど、とめどなく涙がこぼれ落ちるのだ。その涙まで罵られるのなら、もうどうしようもない。私を理不尽に苦しめる一切と決別したかった。それを実行したのは次の日だった。秋の終わりの寒い日だった。

私は駅までの一本道をとぼと歩いた。冷たい風で赤ら顔は火のように火照り、私は恥ずかしさでマフラーに顔を埋めていた。

「寒い、寒い」とだれかが言った。ふと顔を上げると、粉雪が降りかかった。

初雪だ。

はらはらと降るこの雪だけが、今の私のたった一人の味方のような気がした。

けれども、傘をさす人たちが足早に私を追い抜いていき、どんよりとした空からの雪が激しくなってくるとだんだん不安になった。「帰ろうかな……」そう呟いたとき、雪の舞う線路に明かりが浮かび上がった。

雪を纏った列車が近づいてきた。

その光に照らされた雪の渦の中へ、私は今落ちていくのさあ。

何かに取り憑かれたように私の身体は烈しく震えていた。とそのとき、「怖い、怖い」と、私のなかの『私』が叫んだ。軋む列車に『私』の声が虚しく響いた。現実の意識が戻ると降りしきる雪が滲んで見えた。

二ヶ月ほど過ぎた。

ある日、人生という道端に蹲まっていた私はひとりの男に出会った。男は不器用で一途でまっ直ぐだった。私は男の中に明るさを見出し、その明るさに近づきたいと思った。が、それは偽りの明るさだった。私は男にとって、女ではなかった。

男は母親の豊かな乳房に恋い焦がれていた。男の性欲は空想のなかでふくよかな乳房を愛撫することだけだった。だから貧弱な身体を、男は、女として認めず無視し続けた。「オッパイのない女とはセックスできないんだよ」と男は負け惜しみを言った。

じゃあ、それならば、もしも私が男の母親のような乳房であれば男はどう私に言い訳をしたのだろうか。私は思春期に大きく傷つきつまずき、そして、今度は女として深く傷ついた。セックスとは快樂に耽るだけのものではなく、愛し合う「魂」と「魂」を共鳴させ一つの空間を共有することだ。

このことに、男には私に対する罪の意識はまったくなかった。それからの私は心の底から男を疎んじるようになった。かといって、私には帰れる家があった。

社会の中でひとりで生きていける力もなかった。死ぬこともできなかつた。あるのは暗闇のなかで眼を閉じて、か

すかに息をし、明るさを見出したいと希う心だけだった。平成二十四年、母、胃癌にて死去。享年八十五歳。それから三年後、父、脑梗塞で倒れたのち認知症へ。九十一歳でグループホームへ入所。ときどき思い出したように電話が鳴った。遠慮がちに鳴るその呼び出し音は私の胸中に響いた。受話器の向こうの父の顔が浮かんだ。

タンスを開けても台所の戸棚、下駄箱、どこを見ても母との思い出が多過ぎた。

自分や子どもたちの洋服を仕立てたときの余り布も捨てないで取ってあった。何度も編み直された色とりどりの毛糸玉は縮れたままぐるくと巻き取ってあった。いらなくなったボタンは缶や空き箱をいっぱいにしていった。

化粧品、使いかけの手帳までなにかも全部を母はきちんと取っておいた。

母から取り残された物たちはそこにおとなしく横たわっていた。私はここにも明るさを見たように思った。こまやかに記載された通信簿、絵日記から、もう忘れていた校舎や校庭の様子が浮かんできた。授業中の椅子を引く音や笑い声、先生がだれかを指す声を懐かしく思い出した。

持ち帰ってまだ使える物は使いきりたい。そう思って選んでいるうち、私はとうとうと選んでいた。海からの風があまりに心地よかつたせいだ。

気が回らなくなっていたのだろう。よれよれになったシートの中ほどに排泄物が黄色く染み込んでいた。私は悪臭のするシーツを力いっぱい引っぱがすと鉄でシーツを突き刺した。

私は汚れたシーツを切って、切って、それからまた切った。黒ずんだ枕カバーも毛布も布団も切った。その切り口から何本もの糸が垂れ、綿が飛び散り、綿埃が舞い上がった。あとからあとから、白い綿糸は冷たい息を吹きかけながら雪になっていった。

たちまちのうちに私は、はらはらと降る雪に囲まれているのだった。

降りしきる雪の中で、汽笛がポー、ポー、ポーとないた。私は屋上に駆け上がり、海を眺めた。

すると、遠いところにあるのに私の耳には打ち寄せる波の音が聞こえてきた。そこに、潮風に吹かれて歩く幼き日の私がいた。

ふと、波間にきらめく光を眩しそうにいつまでも見つめていた父の顔が浮かんだ。きらきらとした小さな光の中に、過ぎ去った時間がくつきりと浮かび上がって見えた。

強い夏の陽の空へむけて、汽笛がポー、ポー、ポー、と何度もないた。

とそのとき、海いっぱい汽笛の音が広がった。なくよくなその汽笛は私を一瞬のうちに幼い日の『私』へと連れ去り、親不孝な私の胸に迫った。ここまで親に背を向ける、いったいどんな理由があったのだろうか。

こんな愚かな娘のせいで、私の父と母はこの家にぼつんと取り残されてしまったのだ。妻に先立たれ、徐徐に老醜をさらしていった父の姿が父の部屋に見て取れた。

父の部屋は扉の把手が色褪せゆるんで半開きになったままだった。扉のそばに立てかけてあった杖がごろりと転がった。雑然とした部屋の中には食べ散らかした弁当殻やトレイ、菓子袋、茶色く澱んだベットボトルがずつとそのままにしてあった。いくつもの釘が打ちつけられた鴨居に、くたびれたズボンが気安く吊り下げられていた。ベッドの布団の端をそろそろ持ち上げると垢の混じり合った父の匂いが立ちのぼった。

シーツや枕カバーは黒ずむだけ黒ずみ、毛布や布団は縁が擦り切れたり綴じ糸がほころび、どこも染みだらけだった。こんな不潔なシーツで寝ていたんだな、と思うと自身に猛烈に腹が立った。私は手荒くシーツを剥ぎ取り、敷布団を捲った。と、そこに薄く小さな紙オムツがあった。あの尊大でプライドの高い父が死んでも人に見られたくはなかっただろうに、こうしてここにあるのを見ると、もう

受賞の言葉

植村恵子

今になって、私の人生は父と母と共にあったのだと気付きました。私は長い間、暗闇のなかで明るさを見出したいと希ってきました。

ですがそれは、父と母という明るさに背を向け、依怙地に歩きつづけたからだと思います。悩みや苦しみを、私は本当に父と母に伝えることができたのだろうか。もしかしら、私は自分の言い分を正当と思いい込み過ぎたのかもしれない。

父が逝って一月が過ぎました。私の手元に、父が最後までベッドの側に置いていた錆びた小さな缶が残りました。

中には表紙の色がひどく褪せた、私の母子手帳が入っていました。



植村恵子

うえむら けいこ

1954年富山県高岡市生まれ

75 純心短大社会科中退

長崎県長崎市在住 主婦

2006「二十四の瞳」壺井栄文学館

第5回「岬文壇エッセイ」最優秀賞

08第39回「九州芸術祭」地区優秀賞



ピロピロ笛

望月ひろこ

私の夫は難病を患っている。

「脊髄小脳変性症」という病気で小脳が少しずつ萎縮していくため、主に運動機能が衰えていく。手足が不自由になって少しずつ歩みにくくなり、字も書けなくなっていく。最後は寝たきりとなる。

バランスが取れなくてふらついたり、「眼振」といって黒目が小刻みに左右に震えるために、「ぐるぐる回る眩暈」も起きたりする。そして、さらに症状の一つとして「言語障害」もある。六二歳の時に診断されて三年たったところだ。

最近ロレッツが回らなくなってきて、何を言っているのかよくわからないことが増えてきた。何回も聞き返すと「もういい！」と言って黙り込んでしまうこともある。そのため週に一度スピーチセラピスト（ST）の先生が見えて

「言語リハビリ」をしてくださっている。

口は「話すこと」だけでなく「食べる」という仕事もしている。この二つは車の両輪のようなもので、話し言葉が拙くなるのに運動して物を飲み込む力も落ちていくのだそう。最近、味噌汁やスープでむせることが多くなったので、ザルで濾して実と汁を分け、汁の方にはとろみをつけて出している。

夫は食いしん坊なので、言語リハビリはとても重要なものとなっている。どちらも舌・唇・顎・目の下の筋肉・頬の筋肉・そして首の筋肉などたくさんさんの筋肉が協調して動くことで成り立っている。

訓練の内容は多岐に渡る。

最初に「フリートーク」といって、ふつうの「お喋り」をする。先生が「最近どうですか？」と夫の体調を気遣っ

てくださる。夫は先生になら安心して何でも言えるので、自分の体調や、最近の出来事などを話しているらしい。「らしい」というのは、私はお茶を出したらすぐに引っ込んでしまうので何を話しているのか、実はあまり良くは知らないのだ。

次にアイウエオを一音ずつ発音したり、あー、とロングローンで息を続けさせたり、童話をゆっくり朗読したりする。仰向けに寝て頭だけを持ち上げる「シャキア」というトレーニングもある。シャキアは首周りの筋肉を鍛えるために行う。

また「口を閉じてほった膨らませる」というのもあり、それぞれ「一日10回を3セット」というふうに宿題も出る。

夫は先生に「何もないとサボってしまうので、表を作っていただけませんか？ やったらチェックを入れますので、次の週にサインをしていただきたいです」と厚かましいお願いをしたにもかかわらず、このほった膨らませる作業は面倒らしく、ほとんどやらない。音もしないし、単調でおもしろくないのだろう。

そこで私は、一〇〇円ショップで買った「ピロピロ笛」があったの思い出し、押し入れから出してきた。昔お祭りですべて売っていた、先の方がクルクルと丸まっている「紙でできた笛」のことだ。息を吹き込むと、丸まった先が

ピーツと伸びるあれである。以前ボランテアで施設訪問をしていた頃、何かに使えないかと試して二本買ってみたもので、しばらく押し入れて眠っていたのだ。

さっそく自分で吹いてみると、結構ほった膨らませるがう。「やってみない？」と渡すと、夫はおもしろがってすぐに吹き始めた。

彼は宿題とは別に「『天声人語』を音読する」という課題を自主的に毎日やっているのだが、最近とても声が小さくなってきていた。ところが少し読んでつかえた時に、このピロピロ笛を二回ほどシユルシユルと吹いて続きを読むと、不思議なことに声が少し大きくなるのだ。腹筋の使い方を出すのかもしれない。彼は少し休んでは笛を吹き、また続きを読むようになった。

しかし、これだけではつまらない。私はキッチンタイマーを持って来て「30秒にセットしたから、タイマーが鳴るまで何回吹けるかやってみない？」と提案してみた。

彼はちょうど30回、私がかやってみたら45回だった。次の日、彼は31回に増えたが、あまり楽しそうではなかったのだ、私の方で誘うのをやめた。30回も連続して吹き続けるのはしんどそうに見えた。

次に思いついたのは「ピアノとの合奏」である。

「『キラキラ星』を弾くからソのところだけ吹いてね」と言ってピアノを弾き始めた。

彼は「ドドソソ、ララソー」と上手に吹き、なんなくクリア。

「次はソとミだけ吹いてね」と言うと、これもクリア。しかし「ソとファ」になると「ソソファファミミレー」と4回連続して吹くことになるので、ちょっと大変だった。そうやって遊んでいるうちに結構長く吹いたことになり、シメシメと喜ぶ私であった。

夫の場合、進行性の病気なのでこの先「良くなつていく」ということはない。ただ、何もしなければ病気はどんどん進行していくので、少しでもその進行を遅らせるためのリハビリである。

どのくらい遅らせることができたか？ということは、具体的な数字としてわかるわけではない。この病気の特徴は個人差がとても大きく、他人と比較することができないからだ。そのためリハビリの効果を実感するのが難しい。

「どうせ悪くなるんだから、リハビリなんてやってもしょうがない」と言っていて、リハビリをやめてしまった方がいらした。その方は「どうせ効かないのだから」と言っていて、進行を若干遅らせると言われている薬を飲むのもやめてしまわれたと奥様が嘆いておられた。

私の夫は今のところ、そのようなことはないが、「やっ

もある。そういう時はかける言葉が見つからない。

だから私は「リハビリのため」と思っているのではなく「楽しいからやっている」という気持ちで来て、結果としてそれがリハビリになったらいいな、と思っている。

ちなみにこのピロピロ笛をネットで調べたら『吹き戻し』という正式な名前があることがわかった。中に細い針金が入っていて、それがバネのようになってくるくる巻かれて

いるようだ。そこに空気が入ることによって伸びていくらしい。日本だけでなく、外国にもあるようで、英語では Party Horn (パーティー用の笛) というそうだ。

昭和の初めごろは日本中で作られていたが、今では国産の八割が淡路島で作られているそうだ。淡路島には『吹き戻しの里』という観光地があって、このピロピロ笛を自分で作れる体験コーナーもあるらしい。ホームページを見たら、ちょっと行ってみたいとなった。でも、出不精の夫は「車椅子を押してあげるから」と言っても「行かない」と言うだろうな。

最近ではダイエット用にも使われるらしく、ネットショッピングのところでは「ロングピロピロ笛」というものも出て来た。これは一メートルも伸びるもので、試してみたいところ、相当強く吹かないと伸びていかないため夫には無理だった。だから、代わりに私が使っている。

子供のころ、お祭りで購入してもらった吹き戻しは、吹き

口が紙で出来ていたので、すぐに唾液でベチョベチョになり使えなくなってしまうが、今のものは吹き口のところだけプラスチックになっているため紙のところは色が褪せて擦り切れてきたけれど、三ヶ月たってもまだちゃんと役に立っている。

実は夫が飽きた時のために、三股になった変わりタネもこっそりストックしてある。ピロピロが三つの方向に飛び出すのだ。

本当に大変なのはこれからかもしれないけれど、生活の中に楽しいコト、おもしろいコトがあれば、きつと乗り切っていけると信じている。

受賞の言葉

望月ひろこ

初めて応募した時は「佳作」、翌年は「入選」、そして3回目は「三次で落選」と出すたびにランクが落ちていくので、私はもう「書く力」がないのかな、と思っていました。でも、勉強は続けたかったので批評コメントがいただけるこの賞に今年も応募してみました。思いがけない賞をいただき、とてもびっくりしています。

プロフィールにあるように、私は身の回りのことを描くことしかできないのですが、少しずつ視野を広げてそれ以外の内容にも挑戦していきたいと思っています。



望月ひろこ

もちづき ひろこ

- 1952 東京都生まれ
83 愛知県に転居 主婦
趣味はピアノ、エッセイ、短歌
91歳の実母と難病の夫(現在67歳)を介護中
第10回「文芸思潮」エッセイ賞初応募で佳作
第11回同エッセイ賞入選
第12回同エッセイ賞三次で落選



タイのすべてがここに
特価 2000円 (税込/送料共)
注文はアジア文化社まで

確かな友情

宮尾美明

今年のお正月、愛犬のクロに指先を食いちぎられた。慌てて肉片を探して医者に駆け込もうと、吹き出す指先の血をタオルで押さえ輪ゴムで指の根を抑えきよるきよる探したが、ない。ないはずだった。すでに犬の腹の中におさまっていた。

「殺処分だ」

家族が口を揃えて叫ぶ。そのときは確かに私もそう思った。もう手に負えない、絶望的にそう思った瞬間、

「早く処分した方がいいよ」

子犬の頃から何度となく言われた言葉が浮かんでくる。「家族ならまだいいけれど、他人を噛んだらどうするの!」言われなくても分かっている。そしてその可能性がないというわけではなかった。犬が噛むのはすべて突然なのである。何の思い当たることもなく突然に噛みつく。数え切

れないほどいろいろな場面を思い出して暗い気持ちになる。

「早く処分した方がいいよ」

念願の子犬をやつとの思いで手に入れたのにそんな言葉を投げかけられてびっくり。しかも同じ言葉を違う人から三度も。一体何だと言うのか?

初めの人はこういった。

「柴には時々こういう子が生まれる。人に危害を加える子」だという。その人の犬は、あまりの恐ろしさに檻から一度も出さなかったという。初めから檻に入れる人はいない。初めはだれでも可愛いはずなのだ。ところが牙を剥きだして強烈な勢いで噛みついたという。それもいつでもどこでもだれに対しても。あまりの恐ろしさに子犬といえども手が出せなかったという。そんなわけで、散歩はおろか可愛がることもなく、飼い主はおびえながら餌と水だけを

与えた。犬は七年で亡くなったという。

子犬が怖い? そんな馬鹿なことなどあるはずがない。

そう思っていた。

百以上の名前を孫たちと考え、待ちに待ってやってきた子犬は、真っ黒でまるで走る弾丸のようであった。山のよりに考えた名前のどれも消え即座に、

「クロ」

一瞬で名前が決まった。丸々としたこれ以上なく可愛い子犬。ちぎれるように尻尾を振って走り回るのに、だれの手の中にも入らなかった。やがて、クロのむき出しの牙は、子犬の持つ尖った牙で、いわゆる甘噛みの時代をすぐに迎えた。

「甘噛みだから、そのうちなおるよ」

そう言われていたが、クロは手当たり次第に咬みに噛んだ。だれに対してもどんなときでも。幼い孫の顔や手足、もちろん私にも、そしてみるみる家族中のだれに対しても、そのまだ幼いのに鋭すぎる牙をむいた。一度くらい抱きかいた、家族のだれもがそう思った。でも、クロを抱く家族はだれもいなかった。クロが人に牙を向けるのは、ちよつとでも体に手が触れたとき、つまりいつでも牙をむいたのだ。家中のどの部屋にも、もちろん庭にも軟膏が置かれた。咬まれてすぐに手当をするためである。嘔き出す血に対処するためだった。それでも、犬に触れなければなんとか散

歩は出来た。もちろん首輪をつけるときは何度も何度も狂ったように反抗し噛みつき手に負えなかったが、首輪をつけなければ何事も始まらない。必死で生傷だらけになってやつとつけた。

もちろん犬のしつけ教室にも通った。

「こりゃあだめだ」

大の男のトレーナーの人が「こんなはずはない」何度も繰り返す言い、しつけを繰り返してもやつぱり鋭い歯で噛みつきまくって、結局何も出来ないままだった。

一年経つ頃には正直怖かった。すっかり大きくなってその分鋭さが消えた牙は、今度こそ本格的に咬むための牙となって家族のだれもが近づきたくなくなっていた。

一番恐ろしかったのは、仕事に出かけるときであった。

玄関に立ったままじっとにらみつけていたのだ。何と飛びつく瞬間を狙っていたのだ。幸い玄関が二つあったので出入りはもう一つの方でやっていったが、時間が足りず慌てて出ようとする時と決まって飛びついて噛みついた。別に何かがあるというのではなく、わけもなく噛みついた。噛みつく瞬間までじっと様子をうかがっているのが分かるので、怯えるこちらを見透かしているのかと思うような飛びつき方だった。今でも忘れられないのが、出がけに足に噛みついて離れなかったことだった。大量の出血が止まらなかつた。加減を知らない犬はいつも手加減せず思い切り噛み、

決して放さない。恐ろしかった。足中血だらけに職場に駆け込んで、手当の人を絶叫させたこともあった。家族の犬も犬に近づかなかった。世話する私自身がおびえ始めた。「早く処分した方がいいよ。柴には時々こういう子が生まれる」

「囁きが耳元をかすめた。二度目は友人の母親からだった。そして、もう一度は動物病院。待合室で隣の人が気の毒そうに言った。

「早く処分した方がいいよ」と。

そして、私が動物病院に行くと、決まって看護師さんが三人飛んできて押さえつけ口にサックをして治療して貰った。有名だった。

「また、来たか」

と言わんばかりだった。看護師さんはもちろん先生の手も傷だらけになった。

「本当に柴なの？ ハスキーじゃない？」

だれもがそう言うくらい大きくなったころ、

「三歳を過ぎたら少しは落ち着くかも」

期待していた三歳になっても状況は変わらなかった。巨体のクロが

「うわんうわんうわんぐわっ」

恐ろしい勢いで飛びかかって来たときには

「だから、早く処分した方がいいって」

「もし他人を噛んだらどう責任取るのよ？」

だからとも言われ、自分自身にもそういう思いがちょくちょく頭にちらついた。

四歳を前にしたある日、散歩の途中で首輪の鎖が外れ、金具が私の額を直撃した。気を失って倒れていた私がおと気がつく白いものが目に入った。クロの牙だった。

——ああ、ついにここで咬み殺されるんだ！

そう思ったときだった。今まで噛みつくことしかしなかったクロの口から牙が消え、だからだと涎を垂らしながら必死に私を舐めていたのだ。それが軋機だった。噛みつくことがぐんと減り、熱中症で私が倒れていたときなど私が起こるまで舐めまわしていた。

私が窮地に直面したときクロに何かが起きたことは間違いないことだった。それは私にとっては奇跡のような出来事だった。今も噛みつきは少し残っているが、そんなときもハットしたように牙をおさめ、噛みつくことがぐんと少なくなった。

もう安心、そう思っていた矢先だった。私の指先を食いちぎったのに、申し訳なさそうに私の指先をクロは舐める。あのときからクロは尻尾を立てなくなった。尻尾を立てず、じっと身動きしない。感情が推し量れないクロの目を私はやつぱり恐いと感じた。でも、わけの分からない怖さではないような気がした。クロはいわゆるスイッチが入ったら

一日帰ってこない。それなのに遊びには出掛ける。都合の良いときだけ相手をする。はっとした。

「サ ビ シ イ」

クロの物言わぬ目が精一杯語りかけてそう言っているように思った。私がどこにいてもじっと見ている。決して目を離さない。わたしの些細な動きにも耳を傾け、目で、足で追いかけてくる。尻尾を振ってまとい付くようなことは一度もしなかった。素直に表現できないいいじけた態度しか取れないクロの精一杯の愛情が、噛むと言うことだったのかも知れない。犬の専門家が聞いたら、何を馬鹿なことを言っているのだ、そう一蹴されるだろうが、そんな気がする。

年ごとに私の中でクロの存在が大きくなる。気がつくとも何もクロに相談している。何も言わないし、ときには噛む。それでもやつぱりそのときはクロなりのわけがある、そんな気がする。人間と犬との間に確かな友情が結ばれているのは本当だと思う。たかが犬されど犬、ときには人間より大きな力で支えてくれる存在にもなっている。指先を食いちぎられてもおそう思える。

どうしようもなかった。クロ自身すら分からないようだった。ハッと気がついて牙をおさめたときの表情は人間の表情ですらあった。

「人間だって、突然コントロールを失う病気がある。犬だってきつと同じよ」

心理学の勉強をしている娘がぼつりと言う。

そんなときだった。一冊の本に出会った。前に映画を見たが、そのときは何も感じなかったのに、今「犬と私の十の約束」を一つ一つ読んでみるとクロが悪いのではなく飼い主の私が悪かったのではないかと思うことばかりだった。中でも一番涙が止まらなかったのは、「あなたには仕事もあるし友達もいます。でも、私にはあなたしかいません」

「私は十年くらいしか生きられません。だからできるだけ私と一緒にいてください」

「死ぬときはお願いです。どうかそばにいてください。どうか覚えていてください、私はずっとあなたを愛していたことを」

「私にたくさん話しかけてください。人の言葉は話せないけれど分かっています」

「言うことを聞かないときは理由があります」

クロも今年で十一歳になる。噛みつくのはクロがいつも寂しかったときだったような気がする。仕事に出掛ければ



宮尾美明



みやお みあき
洋画家、高校非常勤講師
元中学校教員
受賞歴
文芸思潮「イラスト漫画賞」表紙絵部
門優秀賞
エッセイ賞佳作 他
絵画／現代洋画精鋭選抜展金賞・ド
ローイングデッサン版画コンクール金
賞・木曾川風景画優秀賞・他受賞多数
現代美術家協会会員
文学／藤村文学賞佳作・北野生涯教育
論文2席・シャデイ贈物物語準グラン
プリ・60歳からの主張入賞他受賞多
数

受賞の言葉

宮尾美明

愛犬のためにこんなすばらしい賞をいただいて本当に
ありがとうございます。大好きなクロのために何かを
残さなきゃと思って書きました。犬の寿命に合わせて退
職後念願叶って我が家に来てくれた犬です。私と犬の寿
命をいっしょにしようと思っていたのですが、こればか
りはわかりません。でも文の中でクロと私はいつまでも
若いままだと思っています。本当にありがとうございます。

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭
販売されております。

〔東京〕

ジュンク堂池袋本店

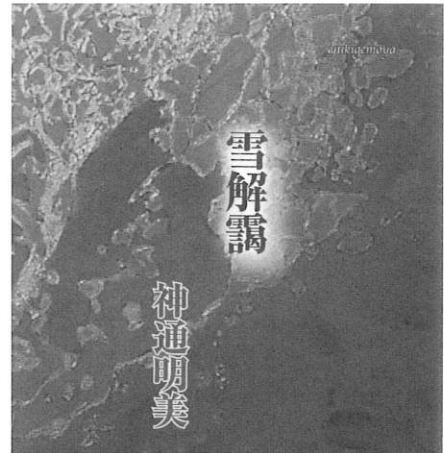
紀伊國屋書店新宿本店

〔大阪〕

MARUZEN&ジュンク堂梅田店

〔インターネット〕

アマゾン



銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものな
のか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫び
をあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人
間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷
文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

裁判の前の現実を素材にした珠玉の短編集

御注文はアジア文化社まで

送料とも 1600円

Essay

第13回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

タエさんと天ぷら鍋

目に当てられた白いハンカチが見えた。タエさんが台所
の隅で、老いた細身の体を震わせ涙をぬぐっていた。広め
の台所の一角に古びた五段の箆筒があり、その二段に彼女
のわずかばかりの衣類と所持品が入っている。その前で声
を抑えて泣いている。

彼女が父に涙ながらに言った。

「家族の一人だと思ってきたのに、あんなことを言われ
て」

引き留める父に耳を貸さず、所持品を入れた風呂敷包み
を抱えて出て行った。

タエさんが泣いているときも、出ていくときも、私は平
気だった。彼女がいないと、母が入院中なのに父がどん
なにか困るだろうとか、そういうことに考えが及ばない。

十二歳の多感な年ごろであった私に慈悲はない。タエさん
や両親の嘆きや困難などわかりはしない。あるのはタエさ
んに対する怒りだけだった。それがカッと火花を散らすと、
ただ獐猛に言い放った。その言葉は彼女の心を打ち砕いた。

四十五歳の母が、体調を崩し、嘔吐を繰り返すようにな
り、近くの医者に行った。

「奥さん、お腹に爆弾を抱えていますよ。病院へ行ってく
ださい」

医者は紹介状を母に書いた。入院後のことを心配した母
はずぐ、家事全般をしてくれる人を探して、新聞に求人広
告を出した。新聞に載ったその日に、タエさんが家にやっ
て来た。

田中美晴

「ごめんください。中川です」

母が玄関に行くと、地味な着物姿の女性が立っている。すらっとして品がいい、色白できれいな肌が印象的な婦人である。彼女の容姿に見とれ、あなたが本当に女中を希望しているのですかと心の内で問いなながらも、求人広告を見たというので、居間で面談をした。

タエさんは、今日ここに来るまでの自分の半生をゆつくり話した。

「戦前、軍人の夫と満州に住んでいました。子供がいなくて、現地で養子を迎え孫も生まれ、幸福な日々でした」
彼女の顔が上気している。話しながら目じりに涙が浮かんだ。

「夫はシベリアへ送られ亡くなりました。紙一枚で訃報に接したので」

終戦後、タエさんは息子一家と着のまま帰国をした。故郷の広島は原爆で灰に帰し、親類縁者の行方もわからない。小さな小屋で息子が果物の商いを始めたが、慣れないことで明日をも知れない生活だと言う。なまぬ仲の息子夫婦とも、落ち着かない暮らしの中でギクシヤクシ、遠慮で居づらいつと寂しそうだ。

「満州時代の夫と私です」

そう言って、彼女は一枚の写真を見せた。軍服姿の夫の隣で、黒紋付を着たタエさんが椅子に座っている。彼女の

娘がタエさんを訪ねて来て、一時間くらい過ごして帰るのだ。

「何で来るの？」

母に尋ねてみた。

「給料日だね。学費の援助をしているのよ」

一九六十年代、彼女の給料は数千円だ。ほとんどを孫に渡し、手元に少し置いておく。そのお金でクリームと日用品を買う。美人の彼女は洗顔後、クリームを塗る。ささやかなおしゃべりだ。

孫もきれいで、母がいい娘さんねと言うと、タエさんは嬉しそうだ。息子一家に遠慮して、援助することで絆をつないでいたのかもしれない。

育ち盛りの小、中学生であった私たち子どもが、タエさんと時間を共にするのは、たいていが台所にある食卓であった。

踏まれても根強く偲べ道草の

やがては笑う春の来るらん

食事の支度をしながら、私たちが、おやつなどを食べているとき、タエさんはこの歌をよく口ずさんでいた。満州時代の話もしていたが、幼かった私にとっては別世界のことで、フーンといった風に何気なく聞いていた。が、何故か歌をよく覚えていた。

「何か証明書が必要かと思いましたが、生憎、何も持っていませんので」

と、彼女は言い添えた。そのもの自体がタエさんの人生を証明する記念写真だ。

母は、その場で即決した。年齢は六十三歳だと言う。

「奥さん、奥さん」と、彼女は母を慕う。母も彼女に優しい。掃除や料理を手際よくこなし、何より清潔好きなのが母を喜ばせた。

私たち三人の子供は、彼女を「おばさん」と呼んだ。年長者を「タエさん」と名前で呼ぶのもどうかと、母が「タエおばさん」か「おばさん」がいいと決めた。タエさんもその心遣いを喜んだ。

彼女が来て安心してから、十日後に検査も含めて母が入院した。彼女は本当に寂しように、残念そうに見送っていた。

母と彼女は、家事が一段落するとよく話をする。今まで胸の中に積もっていたことを吐き出すかのように、母に話をするのだ。

しばらくして、病状が落ち着いたので母が帰宅した。その後、あることに気が付いた。一か月に一度、高校生の孫

数か月後、母が、今度は手術のため、長期に入院した。その一、二か月後のことだった。

夕食のため台所に入った私は、足に熱いような衝撃を受け、悲鳴をあげた。咄嗟のことで、何かを蹴飛ばしたが、冷や汗をかいた。遅れて痛みが走る。天ぷら鍋に足を入れたのだ。叫び声を聞いて、タエさんが飛び込んで来た。

「ごめんなさい。うっかりしてしまっ……冷やさないよ」

彼女は血相を変えて、洗面器に水を用意し、私の足を冷やす。その後すぐ、彼女は気が動転したまま薬局へ走り、帰宅すると、薬と包帯で手当てをしてくれた。その時は、私もカッとして不安で激昂していた。

「こんなところに天ぷらを揚げた油を置いてくなんて」

「薬も買ってきて謝ってるでしょ」

「指がくっついたらどうするのよ」

「見たところ大丈夫よ」

「そんなことわからないじゃない！ 置き場所が悪いのよ」

「謝ってるでしょ。聞き分けのない」

「謝って済むことじゃない。女中のくせに」

タエさんは体を震わせて何も言わなくなった。ヒステリックに捨て台詞を残して、私は台所を出た。しばらくして、足も落ち着き、何かをつまみに台所に

行った。薄暗い隅に人影が見える。電気もつけず、タエさんが息を殺して泣いている。

タエさんが出て行った翌日、母を訪ねた。いきさつを話すと、ああそうとだけ母は言った。病氣不安が彼女の氣力を奪っていたのだろうか。それからは、四十代の女性が通いで家事をしてくれた。タエさんはいない。

まもなく母が退院した。身辺のことが一段落すると、母はタエさんを訪ねた。

彼女は息子の家に帰宅後、一泊すると、翌日、畳屋の杉村さんの家に奉公に出たという。孫娘に援助しても、息子の家には居づらぬ事情がある。

「杉村さんでよかった。あそこなら」

杉村さんには、我が家の畳も世話になった。

その後、母は杉村さんを訪問した。様子を知らなかったのと、いろいろ話しておきたいことがあったようだ。

「杉村さんが、いい人で良かったって」

母は安心するように言った。タエさんは母に会った瞬間、絶句して泣いた。

「私が至らなくて怒らせて」

と言つて頭を下げたそうだ。

後日、母が話してくれたことがある。

「タエさん、年齢を十歳若く言っていたのよ。本当は

七十三歳なのに。七十歳以上だと雇ってもらえないと思って嘘を言ってしまったって。それから、天ぶら鍋は、冷めていると思つて床に置いたけど、大事にならなくて良かったも言つて」

母は、タエさんがいなくて残念そうな、戻らない時間を惜しむような表情を見せた。

杉村さん宅に奉公して数年後に、早朝、電話が入った。

「タエさんが亡くなりました」

母は絶句して、しばらく沈黙した。病床に伏したとも聞いていなかったのに。

「朝タエさんが起きてこないで部屋に行つてみると、冷たくなっていて。心筋梗塞で」

急なことで、呆然とするも、母は安堵する気持ちが生じたようだ。長く寝込むこともなく、義理の息子一家に世話になることもなく、夫のもとへ旅立った。

母によると、タエさんが亡くなる数日前、夫が枕辺に立っている夢を見たとき、杉村さんに話したと言う。彼女は喜々として、美しい顔を赤らめ、夢の中の夫の姿を反芻するような表情で話したそうだ。一人、慎み深く生きるタエさんに、夫が手を差し伸べたのだと母は言った。

杉村さんは、これも縁だからと、自宅に近親者を呼んで葬式を行い、母も参列した。



受賞の言葉

田中美晴

昨夜、台風の直撃を受け、睡眠を妨害された私は、早々に床に就いた。翌朝早く起床すると、留守番電話が点滅している。早速ボタンを押すと、聞こえてきた。

「文芸思潮の五十嵐です」

三次通過の通知から二か月余り。郵便受けばかりを気にしていた私は、ハツとして耳を傾ける。

「優秀賞、おめでとうございます」

一気に目が覚め、再度ボタンを押して確かめた。……しばらく呆然とした。

退職後、人生の様々な事が、ゆとりを持って思い出される。それらを現在の視点で振り返る。生きてきた人生の重み、記憶を現在に運んでくる。それらを言葉で、どのように表現するのか、私の課題だ。今回の受賞を励みに、書き続けていこう。

諸先生方、ありがとうございました。



田中美晴

たなか みはる

岡山県倉敷市で生まれ、小、中、高校時代を広島で過ごす

大阪府豊中市で、公立中学校に勤め、定年退職

現在、神戸『港の灯』同人



子供のときの飴売り

たつのくち
龍口 宏

長野県の伊那谷にある山吹村（現・高森町）の小・中学校の頃、我が家は母子家庭で貧しかった。母は亡き祖父が飯田市で小間物屋を開いていた時代の品物を質屋に入れたり、自宅では量り売りの駄菓子や飴を売っていた。静かな農村であったから、お客さんは一日で一人、二人で、ゼロの方が多かった。

日々の暮らしは戦中戦後の配給制度で、米は現金で買ったが、そのほかの塩、醤油、砂糖等はツケ買いだった。

家の近くの天竜川に架かる万年橋を渡ると、隣りの川野村（現・豊丘村）に小さな食品店がある。人の好い老夫婦が店を営んでおり、母からのツケ買いのメモを渡すと買物を揃えてくれた。待っている間、売物のお菓子を無料で食べさせてくれたので、楽しみな一時であった。余りにも愛

支払う見通しのない母は、その都度いずれいずれで丁重に謝り続ける他なかった。

ある日、母と二人のとき社長がやって来た。今日は酒が入っている様子で大声で怒鳴ると共に、いきなり母の胸倉を掴んで、

「おとなしくしていりゃあ好い気になって、バカヤロー。俺を舐めやがって、今日、全額をもらうまで動かん、帰らん」

と開き直った。

母がバカヤローと呼ばれるのを隣りの囲炉裏のある居間で聞いた。小学五年生であった僕は大人が怒る場に遭遇するのは初めてで、社長の剣幕に驚き、圧倒されて胸の動悸が激しくなり、体の震えが止まらなくなった。

母が罵声を浴びているのを何とかしたいが、どうしてよいか分らない——これ以上に何かが起これば——と思ひ野球のバットを手元に引き寄せた。

やがて、母が涙を浮かべ上気した顔で僕のところへ来た。呼吸を整えてから小さい声で、

「お米を買うお金があるけれど、今ここで支払うと明日からの生活が大変になるけれど、どうしようかねエ」

「あるなら払った方がいいけど……」

社長の大声での剣幕に臆抜けになった僕は、この場から逃れたいためで無責任に言った。そして、米代に使う

想が好いので当然のように持ち帰ったが、ツケの支払いをだれがいつしたかは定かでなく、全額を支払ったかは疑問に思う。

中学校を卒業して上京の際には、僕に饒別までくださった心優しい老夫婦だった。

かまどや囲炉裏で煮炊きをし、風呂を焚くのに薪を必要とした時代である。周辺の家では多分、村の山林で薪にしたが、父が若死にした我が家では、材木店から半端になった木材をツケで買った。

食べ物を優先したため、薪代の支払いが長い期間滞ったので、材木店の社長が憤慨し売らなくなった。当然だがツケの全額返済を迫った。何度も家に来て大声で催促したが、

べきお金を支払うと、社長は上機嫌で帰っていった。父が生存していれば、このような状況はなかったと思いつつも、子供心にも貧乏とは悲しいことだった。

小学校を卒業し中学校に入学する前の春休みの十二歳のときである。幼稚な発想からだったが、家で売っている飴を売って歩く、要は訪問販売をしたら面白いと考えた。母を助けるとか、儲けるなどと大袈裟なものではなく、やってみたかった。

母に願い出ると「宏は兄姉と違い勉強嫌いで可笑しなことばかり考える子」と笑いながら承知してくれた。

母はそのとき四十二歳。飯田市の小間物屋の一人娘として生まれ、琴・三味線を弾き盆石を創作し贅沢な暮らしをした。祖父、父の若死にと戦争の影響によって生活状況が一転したが、大らかな性格で美人であった。

飴売りの前夜、楽しい飴売りを夢想しながら寝た。

当日、母が飴を秤で量った白い紙袋十袋を手籠に入れて、一袋を五十円で売るように言われた。

——売る飴であるが「温泉ヌガー」といい、一つずつオブラートと紙に包まれており、表の紙に「温泉ヌガー」と印刷されていた（ヌガーとは「ナッツや果物の砂糖漬けを入れた白い柔らかい飴菓子」広辞苑）。ヌガーはフランス語で目新しいものの、温泉は不似合いに思うが、当時、伊

那谷ではありふれた鮎と記憶している——

鮎売りの訪問先は、住居のある山吹村を避けた。狭い村は友達や知り合いに会うと恥ずかしいので、ほとんど知らない隣りの大島村（現・松川町）を売り歩くことにした。

我が家は天竜川の近場で大島村と山吹村の境界近くにある。家の裏から畑を幾つか横切り、土手を駆け上がると大島村の林道に出る。暫く行くと山林から田畑に変わると大島村であるから家と家とは間隔がある。家が見えて来るが一軒目二軒目は、親同士が知り合いなので通り過ぎた。

いよいよ目指していた大きな屋敷で蔵もある豪農らしい門構えの家からがスタートだ。

——勇気を出して行動すべきと心に言い聞かせるが、初めてのことので口が渴き気が高ぶる。自分が自分でないようだ——

桑畑が続き途切れると目指す豪農のはずだった。桑の葉で見えなかったが、手前に新築の平屋建ての家がある。庭で中年の夫婦が楽しそうに大豆を乾燥する作業をしていた。その場が余りにも明るかったので、ふらふらと導かれるように、予定を変更し夫婦の庭先に入った。奥さんが気付き怪訝な顔をして僕のところに来た。

「見慣れない子、何なの？」

「鮎を売っていますが……」

「アメ？ 要らない」

県道を渡りさらに上へ上へと登り、人家がない辺りまで辿り着いた。土手に座り、登って来た方向を見る。向かい側の南アルプスの山々が美しく、天竜川が横一線になり白い糸のようだ。美しい景色を眺めていると心が和むはずだが、ぼんやりと空ろである。山々は偉大で感嘆するが、悩みを解消するには至らない。

空腹と疲労で考えが停止して、暫くぼんやりしていた——鮎売りはやめたい、やめようと思う。一軒しか訪問していないが二軒目も同じことになれば、これ以上に傷つきたくない——だらしないかもしれないが、そう決めて帰るところにした。

登って来た道をまるで敗北者のような空しい心境で下りていった。

昼食を持参しなかったので、空腹も著しい。間に合わせに売物の温泉ヌガーを一口口に入れた。空腹だったので甘さが体にしみ渡り刺激した。少し心が穏やかになる。単純にも憂鬱さから朝の意気込みが戻りつつある。気持がころころ変わって、このまま帰るならば、理解してない言葉だ「男が廃れる」と思った。

勇気を奮って最後に田畑がある農家に入って行った。玄関から訪ねようとしたら縁側の前で、大柄な男子中学生が自転車の手入れをしていた。年上らしいが相手が中学生なので照れ臭かったが、

疑わしい相手にきっぱりと懲らしめるような言い方だった。そして、

「この辺りをふらつかないで遠くへ行つて」

夫のところに戻り「変な子、おかしな子」といい二人で笑った。

なぜ笑うのだ。軽蔑した笑い。一連の会話に呆然と立ちすくむ。これが大人の発言か。夢見た楽しい鮎売りの想像と現実の違いを。こんなはずではなかった。頭に血が上り、シヨックで何が何だか分からない。どうしよう？ 予定していた豪農の家に訪問する気が全くなかった。

今あった事実を何度も反復し、ただ歩いた。大島村の最上に向かつて坂道をひたすら歩いた。人に会いたくなく言葉を変わしたくなく人を避け、伊那大島駅を通過し春休みでだれもいない大島小学校、中学校を夢遊病者のようになって通り越して行った。

県道に出たところで近辺の主婦四、五人が井戸端会議中だった。そこを隠れるように通り抜けようとしたとき、大きな籠を持った僕を不審に思ったのか、一人の小母さんが優しく声を掛けた。

「家を捜しているの？ 困っているなら相談しなさい」

折角の好意を無言で一礼し、その場を去った。——後から思えば籠の中を見せれば、同情して買って貰えたかもしれない……だが、そうした気分になれなかった。

「鮎を売ってます。買って貰えませんか」と言った。

彼は僕を見てびっくりした様子だったが、家の中に声を掛けてから、

「要らない、と言っている」と答えた。頭を下げて家から離れて道に戻った。

断られたが、今度はシヨックでなかった。単なる鮎だが簡単に売れるものではない。これで今日の全てが終わった。夢想と無知と現実の違いがよくわかった。

だからだらした坂道をだらしなく降りて行った。——後ろの方から「鮎屋さん、鮎屋さん」呼ぶ声があった……暫くの間、他人事だと思っただが、鮎屋は僕だと我に返る——さっきの中学生が道に出て大声で叫んでいる。戻って来ると「婆ちゃんが呼んでいる」と中学生。

縁側の障子が開かれており、今まで寝ていたであろう蒲団に、お婆さんが笑顔で座っていた。お婆さんは最初は断ったが、多分、孫である中学生に、どんな人が売りに来たかを聞いて、子供と知ったので同情して呼び戻したに違いない。

お婆さんは優しく微笑みながら伊那弁で、「どこから来たなア」「歳は幾つかなア」「親はいるのかなア」

いろいろ答えるのを聞いてから、「偉い（感心）なア、偉いなア」となんべんも褒めてくれて、鮎を買ってくれた。

聞かれる度に僕は型通りの返事しか出来なく、売れたときの言葉を留意してなかったから、口籠り、ぎこちなく頭を下げるだけだった。だが、表情にならないものの、たまらなく嬉しかった。両腕を突き上げて叫びたいくらいに嬉しかった。感謝の気持ちを笑顔で返すべきだったが、表現できないのが、情けなく残念だった。

別れるときお婆さんは、僕の顔をじっと見つめ、暖かい眼差しで言った。

「もうじきいいことがあるで、我慢しなんしよ」

長年様々なことを経て生きて来たからこそすべてが解るようで、初めて会う僕の境遇を悟り、涙顔までになった。その慈悲に満ちた顔は、家の床の間にある観音菩薩の顔に似ていた。



龍口 宏

たつのくち ひろし

1937 東京生まれ
 長野県伊那谷に疎開し山吹中学校卒業
 聖橋高校定時制卒業
 15歳で入社した山越製作所は6年半で倒産
 明治大学二部文学部中退
 正・準社員・アルバイトとして15、6
 社経験、この経験で実戦に強くなった
 25才で某大手業界新聞社入社
 35年勤務 定年退職
 人それぞれで楽しい職場だった

受賞の言葉

龍口 宏

八〇歳代になり大病したため、そろそろ死の準備をすべきと思っていました。具体的な行動がはつきりとわからないまま迷っておりまして。

そのようなときに私の作品「子供のときの飴売り」が優秀賞受賞の連絡をいただきました。

予期せぬことで、嬉しく頭の中が空白。死の準備を中止にしてしばらくエッセイを優先することにしました。

選者の方々に私の作品を選んでいただいたことを深く感謝します。ありがとうございました。



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を
 語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。
 付随した死傷で異国に亡くなった数多くの死体が散らばっていた。

健友館

カンボジア難民の悲劇を描く
 1836円(税込/送料共)
 御注文はアジア文化社まで

生きる

手を日の光にかざすと、うつすらとピンクに染まり、私の体には血が流れていると感じる。ほんのりと赤い私の爪。温かい私の指先。

私は不妊治療の末、双子を妊娠した。妊娠生活は思い描いていたものとは違った。破水したまま十日間を子宮の中で過ごした二人は、七カ月という未熟さでこの世に誕生した。呼吸が自発的に出来ないという困難から娘達の人生が始まった。保育器に入れられ、繋がれた何本もの点滴。透けるような肌、大人の小指ほどしかない手足。脳内出血を起こし、さらには心臓の弁が自然に閉じず産まれて間もなくの心臓手術。発育の未熟さから起こる未熟児網膜症を発症し網膜剥離を避けるため手術を行った。小さな二人には大きくて高い「生きる」という壁が幾度となく立ちちはだかる。私達は無力だと保育器の前で涙が溢れそつと触れた

音葉 紬

つむぎ

体。しかし、いきなりその小さな手は私の指を掴み、全く想像できない程の力で離さない。生きていて、これから先も生きる。全身の力を込めて私に伝えてくるかのようだった。生きることを諦めず小さな手で大きく未来をつかもうとしている。保育器の中でたくましく育つ二人には、生きる力強さがある。それは私達夫婦の生きる原動力になった。

あれは夏の暑い日の夜だった。それなのに触った手はまるで中心部から凍っているかのように冷たく硬く、灯された明かりの中に透けるような何の汚れもないほどの青白さで弟は横たわっていた。弟は三十歳という若さでこの世を突然に去った。娘達が長い入院を経て家に帰ってきた頃のことだった。遠く離れた実家の母が脳出血で倒れた。一命は取り留めたが、半身麻痺の後遺症が残った。夫婦でシイ

タケ農家を営み生計を立てていたが、父が自営の仕事の他に高齢の祖父の面倒と母の看病、やったこともない家事を一人でこなさなければならなくなった。酪農からシイタケ農家に転身した際の借金も、多額に残っていた。私は四人兄弟の長女。妹二人は実家から離れた場所に嫁いだ。

弟はお嫁さんをもらったが、義母が個性の強い人だった。妊娠中に父親が蒸発し女手一つで育ててきた大切な娘が高齢の家族が多い我が家に嫁いだのでは介護生活が目に見える苦勞を案じた義母は、家を建て弟の部屋を用意し娘夫婦との同居を自分のシナリオ通りに進め、弟が実家と繋がることを拒んだ。弟は義母を恐れ、隠れて実家に帰った。父親を知らずに育ったお嫁さんは、父親という存在を毛嫌いした。出産で入院した時も父だけは病室に通さなかった。義母は弟に少し連絡が取れないだけでナーバスになり、血眼になって電話をかけまくって探した。お嫁さんの家に入った男性はなぜかいなくなったり亡くなったりして女だけが生き残るということを妄信していたのだ。弟だけは絶対逃がさないと常々口にしてた。

そんな中過勞で父が倒れ、弟は父の借金の連帯保証人になっていたため、両方の家族の間で板挟みになり、義母も一緒に住むお嫁さんの家族の中に居場所を失った。半年もの間車中泊しながら仕事に通っていた。私は娘達を児童養護施設に預け、単身で長期間実家に帰

ようには変えられないがらめの現実があった。「姉ちゃん、俺にはもう居場所がないんだ。嫁とはもうやっていけないと思っても、子どもたちの父親でなくなることもなか考えられない。息子が赤ちゃんの時、俺は自由に抱っこすることもできなかった。本当の父親になりたかった。一からやり直せるなら嫁と二人で苦勞しながら本当の家庭を作ってみたかった」そう言って全身を震わせて激しく泣いた。後ろ髪をひかれる思いで故郷を後にした。

家に戻ると突然弟から電話があり、何度も「姉ちゃんありがとう。ありがとう」とお礼を言うのだ。それから弟は母の病院で一日を過ごした。麻痺した母の手を取りりハビリに付添い、食事を介助し、いつもの優しい面倒見の良い弟の姿で母との時間を愛でるように過ごした。

弟の死はそれから一週間後のことだった。入院中で体調が悪かった母には弟が交通事故で亡くなったと伝え、病院から外出許可をもらって最後の別れをさせた。自分より先に逝ってしまった息子を前に母は激しく泣いた。しかし最後まで見送るのだと皆の前では気丈に振舞い、母は「苦しかったるうに」そういつて動かない体で必死に弟の口に水を含ませてやり、いつまでも弟の頭を優しく撫で続けた。

義母は横たわっている弟に向かい「あんたはどこまで私達を苦しめれば気が済むの」とぶるぶると震えながら怒り

り、祖父母の介護と両親の看病をすることにした。弟の事情など全く知らず、近くにいながら家になかなか顔を出さない弟に不信感を持った。しかし私には子どもたちを置いてきたという罪悪感があり、心配な子どもを置いてくるなんて鬼母だと罵る人もいて、今自分にできることを精一杯やるのが娘達へのせめてもの償いだと思い、毎日必死で過ごした。疲勞感ばかりが増す毎日の中で、弟の小さな変化には気付くことが出来なかった。

病院からの帰り道、人気のない道路に路駐している車があった。ライトがあたった周辺の流れる景色の中から私の視界の隅に川を見て立ち尽くす弟のシルエツトが映った。急ブレーキをかけ、声を掛けると「何でもなよ。腹減った。家に帰ろう」と言う。家に帰り残り物を温めてやると、弟はビールと一緒に一気に食べ干し、私は疲勞感が襲ってきて眠りに落ちてしまった。

目覚めるともう弟の姿はなかった。祖父母は介護ヘルパーを遣っていたのだが、お嫁さんの親族が担当しており、家に自由に出入りし、弟は常に監視されている状態だったのだ。父の退院後私は職場復帰を控えており、家に戻ることを決めた。最後の日、弟と争いになった。両親を託せない不安もあったが、弟の立場が苦しいことを父から聞き、心配だった。私は弟に幸せに暮らしてほしいという思いを伝えたかっただけだった。しかし弟には、思い描くを露わにした。義母とお嫁さんが葬儀に参列することはなかった。

父は、見送る日の朝、弟の思い出の場所を一つ一つ周りに最後にお嫁さんの家の前を通り、大きく一つ霊柩車のクラクションを鳴らした。父の精一杯の誠意を込めて。母はそれからというものの弟を出産した時のことを語るようになった。臍の緒が首に絡まりなかなか産まれず、三人から輸血を受け命がけで産んだのだ。その話を聞くと家族の胸は痛んだ。弟の最後も首にロープが絡まっていたのだと思う。横たわっている弟の体は、心臓が動いていないという以外私と何も変わらないのに、もう動かず笑わない。「姉ちゃん、釣りに行こう」といつもの調子で私を誘ってはくれない。こんなにも簡単に生の世界は閉ざされてしまうものなのか。弟の固くて冷たい手は、娘達が私の手を小さな手で強く握りしめてくれたように握り返してはくれないか。何故弟の話にもっと心を傾けてやれなかったのか。救えなかった後悔は私をいつまでも追いかけてきた。

父はそれから一人で全てを背負うと決めた。父は独力で祖父母と母の介護を淡々と日々を送った。来る日も来る日も弟の死を背負い、ただひたすらに。

お嫁さんは弟の骨を欲しがった。しかし父は、亡くなってからも息子の体をばらばらにするなんて考えられなかった。息子が安らかであることを願った。分骨を拒否すると、

絶縁を迫られた。父は息子も孫も一度に失ったのだ。

「父ちゃん母ちゃん、命をかけて守るからな」

弟が父にあてて残した最後の言葉の意味は絶縁だったのかもしれない。「なんで年寄りが先に逝けなかつたんだ」としわくちやの手で弟の冷たい手を温めるように握りしめ泣いていた高齢の祖父も、弟の死からほどなくして亡くなった。祖父の老いた手は小さく細く萎み、それなのに深く刻まれた皺は、八十年以上生きてきた歴史が刻まれていた。静かな中にも決して喜びだけではない人生を生き抜いてきた重み、生きることを全うした強さを感じる死。看病を続けてきた父は、その死を後悔なく迎えた。

とうとう父は母と二人きりになってしまった。父は献身的に老々介護し数年を母と一緒に過ごした。父と母にはこれからもずっと緩やかに時間が流れていくかのように思えた。しかし、父の体は限界だった。介護疲れから脳梗塞を起こし、半身麻痺の体になってしまった。母は施設へ入所し父は入院、リハビリを経て自宅でヘルパーの助けをもらいながら、一人暮らしの日々が始まった。息子と両親のいた家を守ることが父の使命であるかのように。週二回のデイサービスで面会できる父と母。住む場所は違っても、お互いが生きていくことを感じ合えることはどんなに心強いことだっただろう。

ことの積み重ねなのかもしれない。

しかしそんな静かな日々を自然の力は、一瞬でぶち破った。観測史上初めてと言われるほどの大型台風は太平洋を越えて父の故郷を壊滅的に破壊し、父はその日行方不明になった。緊急通報を最後に連絡は途絶え、何もかも遮断された状況をテレビから流れる映像を見て初めて理解した。

その夏は帰省できなかった私。遠くに嫁いだことを悔やむ。苦労ばかり背負う父の生き方に反発し思春期は家出を繰り返し、十八で家を飛び出した。頑固者同士ぶつかってばかり。心配は人一倍かけたのに、親孝行は何一つできていない。それどころか発達障害の我が子達は手術の繰り返しで、実家に帰ることも難しく、父に孫の顔も余り見せてやる事が出来なかつた。苦しい時いつも父は一人だった。

年々小さくなっていく父の背中を見て、あんなに大きく見えた父の背中に老いを感じ胸が熱くなった。しかし父の背中も、背負えない程の苦しみを乗り越えた偉大な背中。だれもがもう駄目だろうと思っていた二日目の夜、衰弱した父が救助された。家を土砂が貫通し天井まで達した泥。十メートル以上も土砂に押し流された父は、生きるという強い意志で、土砂の中から動く右手足の力を精一杯使って這い出した。土砂が入り見えない目、濡れて泥まみれの体で恐怖と寒さ暑さや飢えに耐え続けた。

私は、すぐに新幹線に飛び乗り父に会いに行った。ベッ

しかし母の老いは早かった。どんどん動かなくなる手足。食事も呑み込めなくなり、点滴のみになり、全身にむくみが現れるころには周りの声にも反応しなくなつた。しかし、骨が浮き出て細く白いその手を握ると、母はここに生きていくというような強さで握り返す。ざらざらでこつこつだった母の手。美味しい料理を作ったり、優しく頭をなでてくれたり、「この手は便利でしょ」とざらざらした手で背中を搔いてくれたりする魔法の手。愛が染み込んでいる手。冬になると指の間が裂けよく痛がっていた。苦労ばかりでおしゃれもせず、父と手を取り合って私達を育ててくれた大好きな母の手。母の命は少しづつほんの少しづつ消えゆく灯のようにすり減っていき、私達が心の準備ができてまで待つてくれているような静かで優しい最期だった。

父はとうとう一人ぼっちになってしまった。山間の小さな集落で暮らす父。高齢化とともに過疎化が進み、一軒また一軒と家が無人となっていく。夜は漆黒の闇に包まれるが、見上げれば満点の星空。父はこの景色を何十年も見て暮らしてきた。喜びも悲しみも苦しみも全てここで味わい守ってきた。体が動かなくなり、孤独の中でも、父は訪れた安息の時間を味わって過ごしていたのかもしれない。起きてご飯を食べて盆栽を眺めた寝る。ひっそりと時間が過ぎていく。シンプルだが、生きるとは毎日の生活を営む

ドの上の父は、体中打撲だらけ傷だらけ。目は腫れあがり恐怖心からナスコールが手離せない。父は私達に常に無言で生きる姿勢を見せ続けてきてくれた。握った父の手は温かい。全てを失ってしまったけれど、父の手の温かさに生きている喜びと安堵を感じた。血が通っているだけではなく、困難に立ち向かい、もがきながらも前を向き転んでも何度も立ち上がり、泥臭いけれど人間臭く生きていることを、死を背負い死と直面しながら生き続ける父の姿こそ生きることそのものと、力強く握り返す父の手が私に語っている。

小さかつた子どもたちは、もうすぐ将来を自分の手で掴んでいく年齢になった。生まれてから今まで発達障害の娘達を待ち受けていたのは、周りから理解されず孤独といじめの日々だった。かつて娘達の手を握り、弟のいる世界へ心が何度もさまよった。しかし娘達は転んでも何度も立ち上がる。純粹な目で光の先を見つめる。あの時と同じように握っている私の手を、私の弱い心を力強く握り返す。破水し超早産を覚悟したあの夜、恐怖の中で父に電話をして泣いたあの夜。「どんな風に生まれようとそのままを大事にすればいい」口下手な父が私に言った一言。そのままを受け入れ、そのままを愛する。父が私にそうしてきてくれたように。絶望の中にあっても希望を信じた父の生き様のように。

舞台の感動をこの本とDVDが再現します。

戯曲

核の信託

—原爆をだれの手にもゆだねるか—

五十嵐勉

1000円(税込/送料共) 御注文はアジア文化社まで
DVD 1500円 本+DVD 2000円(送料とも)

アジア文化社



音葉 紬



おとは つむぎ

1971 岩手県生まれ
89 県立岩泉高等学校卒業

同年盛岡グランドホテル入社
2年で退社後、27歳まで全国を仕事しながら、バックパッカーとして生きる

27歳で社員採用されシナノケンシ(株)で13年間働く
その間に結婚、出産をするが超未熟児、発達障害の双子を育てるため退社。

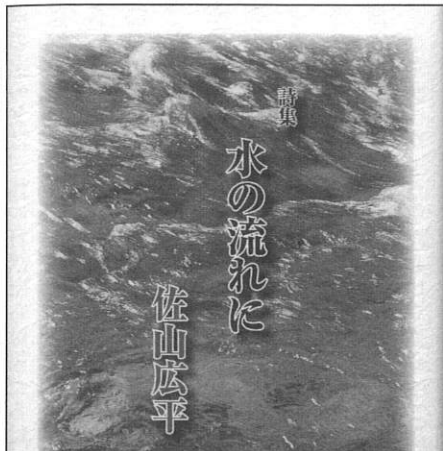
退社後すぐ、児童福祉施設より仕事の依頼があり、パート職員として現在に至る

受賞の言葉

音葉 紬

この度は身に余る賞をいただきまして、誠にありがとうございます。

長く暗いトンネルの中をさまよい歩いてきたような今までの日々をやっと今回顧みられるようになり、軌跡を文章にして残したいという強い思いに突き動かされて書きました。両親の生き様を心に焼き付け、これから未来を創っていくであろう我が子達に繋いでいくために、私と私の家族の歴史を文章という形で刻むことができ、大切な作品となりました。

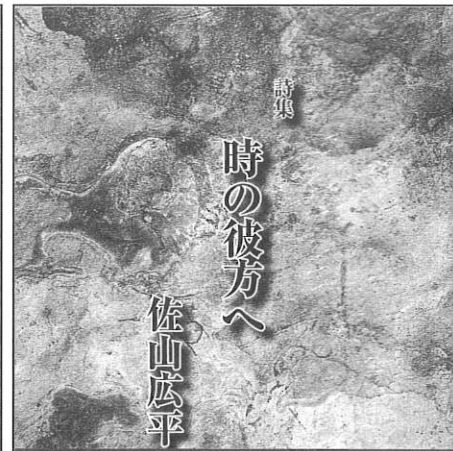


「文芸思潮」現代詩人賞受賞詩人の第三詩集

佐山氏にとって水の面の散乱する光の群れは、時を遡る命の騒ぎだ。詩という水の流れは、源への旅を乗せて、過去へと遡る。その旅は、自身の生の意味を問いかける。「水の流れ」は自身の命の意味への深い問いだ。 「文芸思潮」五十嵐 勉

1620円(税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで



「文芸思潮」現代詩人賞 受賞

少年期のみずみずしい自然は時を越えるからこそ、いっそう清流の匂いを孕んで、耀き映える。佐山 宏平氏の詩は、時の激流の上に架けられた、光のきらめきの海を渡ろうとする永遠への橋だ。少年のみずみずしい眼差しが、彼岸を貫こうとする。

「文芸思潮」五十嵐勉

1620円(税込/送料共)